

松原遺跡 発掘調査報告書

1994

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

まつ
ばら
松原遺跡
発掘調査報告書

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



東地区発掘調査状況(東から)



ST 4 住居跡全景

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、松原遺跡の調査成果をまとめたものです。

松原遺跡は、山形県の南東部に位置する米沢市にあります。米沢市は南側を吾妻連峰に接し、東側を最上川及びその支流の羽黒川、鬼面川などが流れる緑豊かな街です。

調査では、縄文時代前期の竪穴住居跡と、同じ時代の土器や石器などが発見されました。道路整備事業に係わる調査のため発掘面積は多くありませんが、縄文時代の集落を理解するうえでよい資料を得ることができました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われる方が今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が達成されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は、県農免道路整備事業米沢南部II期地区に係る「松原遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は山形県教育委員会の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査の要項は下記のとおりである。

遺跡名　　松原遺跡 (DYZMB)　　遺跡番号 1180
所在地　　山形県米沢市大字関根字白旗松原
調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター
調査期間　発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日
　　　　　現地調査 平成5年6月21日～平成5年7月16日
　　　　　平成5年8月30日～平成5年9月1日 延べ24日間

発掘調査担当者

調査研究課長　佐々木洋治
主任調査研究員　佐藤　庄一
調査研究員　伊藤　邦弘

資料整理担当者

調査研究課長　佐々木洋治
主任調査研究員　佐藤　庄一
嘱託職員　黒坂　広美

- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県農林水産部農地建設課、東南置賜地方事務所耕地課、米沢市教育委員会等関係機関の協力を得た。現地調査と報告書作成に当たって、秦 昭繁氏、手塚 孝氏からご指導賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、佐藤庄一、黒坂広美が担当した。編集は安部実、伊藤邦弘が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。
- 6 遺物実測図のうち打製石器については、株式会社シン技術コンサルに実測業務を委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1	本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。				
SA	杭列	SD	溝跡	SK	土壤
ST	住居跡	SX	性格不明遺構	EP	柱穴
EB	掘立柱列柱穴			S	礫
RP	一括土器	RQ	石器		

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸はN-7°38'-Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/40・1/200縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
- (4) 遺構観察表中の（ ）内の数値は、検出部分の計測値を示している。
- (5) 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3・1/4で採録し、各々スケールを付した。
- (6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通のものとした。
- (7) 遺物観察表中の（ ）内の数値は、図上復元による推定値、または残存地を示している。また、出土地点欄の層位で、Fは遺構覆土内出土、ローマ数字（I～VI）は遺跡を覆う土層（基準層序）を示している。
- (8) 遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 自然環境	3
2 歴史的環境	3
III 検出された遺構	
1 遺構の分布	5
2 遺跡の層序	5
3 住居跡	8
4 落ち込み遺構	13
5 土 壤	16
6 掘立柱列	16
IV 出土した遺物	
1 縄文土器	19
2 石 器	22
V まとめ	
1 遺構について	26
2 遺物について	27
報告書抄録	28

表

表1 遺構観察表(1)	12
表2 遺構観察表(2)	18
表3 石器観察表	25

挿 図 版

第1図 調査区概要図	2	巻頭図版 東地区発掘調査状況 ST 4 住居跡全景
第2図 遺跡位置図	4	図版1 遺跡遠景 東地区発掘調査状況 図版2 西地区遺構検出状況
第3図 調査区遺構配置図	6	追加調査地区発掘調査状況 図版3 東地区遺構全景 西地区遺構全景
第4図 北壁土層断面図	7	図版4 10-28・29東西土層断面 10-30～32東西土層断面 10-40～42東西土層断面
第5図 ST 1・3・5住居跡	9	図版5 ST 1・5全景 ST 1全景 RP 2出土状況 ST 5全景 ST 5東西土層断面
第6図 ST 2・4住居跡	10	図版6 ST 2全景 ST 4全景 ST 4 南北土層断面 RP 3出土状況 ST 4・SX 8全景
第7図 ST103・104住居跡	11	図版7 ST 3全景 ST 3東西断面 ST 6・SX23全景 SX10全景
第8図 ST 6住居跡・SX23遺構	13	図版8 ST103・104全景 ST104全景 RP11出土状況 ST103・104南北 土層断面 ST104南北土層断面
第9図 SX10遺構	14	図版9 ST 1東西土層断面 ST 2掘り 下げ状況 RP 7出土状況 SX 8東西土層断面 SX 7全景
第10図 SX11・14遺構	15	図版10 SX11全景 SX14全景 SK42・ 43全景 SK44東西土層断面 追加調査地区全景 SK101全景
第11図 土 壤	17	SK102土層断面 SK105土層断面
第12図 原体等模式図	20	図版11 繩文土器(1)
第13図 繩文土器(1)	20	図版12 繩文土器(2)
第14図 繩文土器(2)	21	図版13 石 器(1)
第15図 石 器(1)	23	図版14 石 器(2)
第16図 石 器(2)	24	図版15 石 器(3)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

松原遺跡周辺は、昭和24年頃までは原野をなしていた。昭和35年から38年頃にかけて地元の香坂幸子により多数の土器片・石器が採集されたのを始めとして、高橋堅治、亀田晃明、金儀右エ門、柏倉亮吉らが次々と本遺跡を確認している。昭和39年発行の「山形県遺跡地名表」にも掲載され、いち早く遺跡として登録されている。

昭和40年以降、工場や宅地開発によって遺跡が狹められていったため、昭和46年8月置賜考古学会の橋爪建・秦昭繁らが正式な発掘調査を実施し、縄文時代前期始めの米沢市における代表的な集落跡であることが確認された。

その後、県農免道路の米沢南部II期地区に松原遺跡がかかることになったため、平成4年10月に山形県教育委員会が道路予定地に限定して遺跡詳細分布調査を実施した。分布調査では、縄文時代前期の土器・石器と土壤や小穴が確認されている。この調査内容をもとに、山形県教育委員会が関係機関と遺跡の保存について協議を行った結果、財団法人山形県埋蔵文化財センターが、山形県農林水産部から山形県教育委員会経由の委託を受け、今回発掘調査を実施することになったものである。

2 調査の経過（第1回）

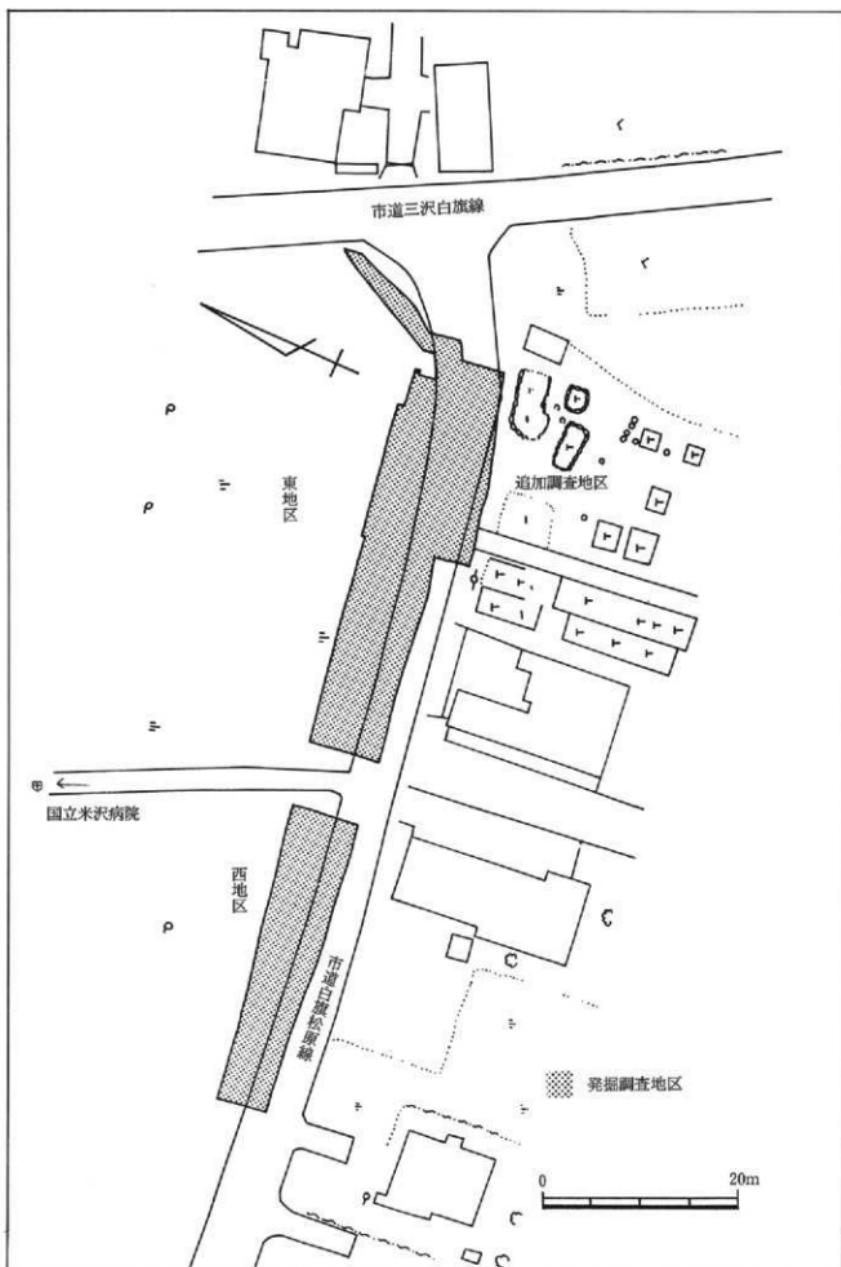
松原遺跡の範囲は、これまでの諸調査による結果から、東西約100m、南北約250mと推定されるが、今回の調査区域は県農免道路工事部分に限定している。農免道路は、遺跡の中央を東西に横切ることになる。

発掘調査は平成5年6月21日から開始し、中央の市道を区切りにして東地区（長さ50m）と西地区（長さ32m）の二つに分けて行った。調査は、最初に農免道路の拡幅部を調査し、次に現道路の北側を路盤を壊して調査している。なお現道路部分については、付近の住民の通行を確保する必要があることから、当初幅3mほどを残して調査を行っている。既存道路の下には水道や電気の配管が埋設されており、その安全対策と遺構の繋がりの確認にかなりの労力を要した。

調査は、まず重機を用いて表土を取り除き、次に土の状態を確認しながら、ジョレンで少しづつ全体の面を削り遺構の検出を行った。東地区からは縄文時代の竪穴住居跡、西地区からは性格不明の落ち込み遺構や柱穴等が検出されている。さらに土色や土質に着目しながら、住居跡等を移植窓で丁寧に掘り進め、縄文時代の人々が残した痕跡や遺物（土器や石器）を図面に記録している。またこれと並行して、その都度写真撮影や遺物の取り上げを行っている。

発掘調査の最終日前日にあたる7月15日に、調査の成果を地元の方々や関係者等に知っていただくための調査説明会を遺跡現地で行い、多くの参加者をえた。当初の発掘調査は7月16日に終了し、器材撤収を行った。さらに通路として残した部分のうち、遺構が広がる箇所については、8月30日から9月1日に改めて追加調査を実施した。

I 調査の経緯



第I図 調査区概要図 (S=1:500)

II 遺跡の立地と環境

1 自然環境（第2図）

松原遺跡は、山形県米沢市大字関根字白旗松原に所在する。米沢市街地の南東約5.5kmにあり、最上川の源流である羽黒川の左岸に立地する。山形県の南西部に位置する米沢市は、その中央部が米沢盆地南半部となっており、それをとりかこむように北西部は玉庭丘陵と呼ばれる低平な丘陵地、南西部と南部は笹野山の小山塊および吾妻火山群の山麓で高度500~700mの山地となっている。また盆地の東側は、奥羽脊椎山脈の一部をなす豪士山から栗子山の山稜とその西側の山麓群となっている。

羽黒川は、梅森（つがもり）山麓一帯と板谷峠付近から流れる沢が合流したものでJR奥羽本線とほぼ並行して流下し、河岸段丘を形成し、松川と合流しながら米沢扇状地群を作っていた。

松原遺跡は河岸段丘に沿って東西100m、南北250mの範囲に広がっている。遺跡の西側には、昔の河川の流れによって堆積した厚さ10cmほどの砂礫層が分布しており、標高は、約284mを測る。表層の地質は砂及び泥の末固結の堆積物で、土壤は芝続の中粗粒褐色低地土壤を主としながら、一部黒ボク土壤も分布する。

遺跡付近は開発が進み、現在の地目は、雑木林、畑地、宅地、墓地、道路など多様になっている。

2 歴史的環境

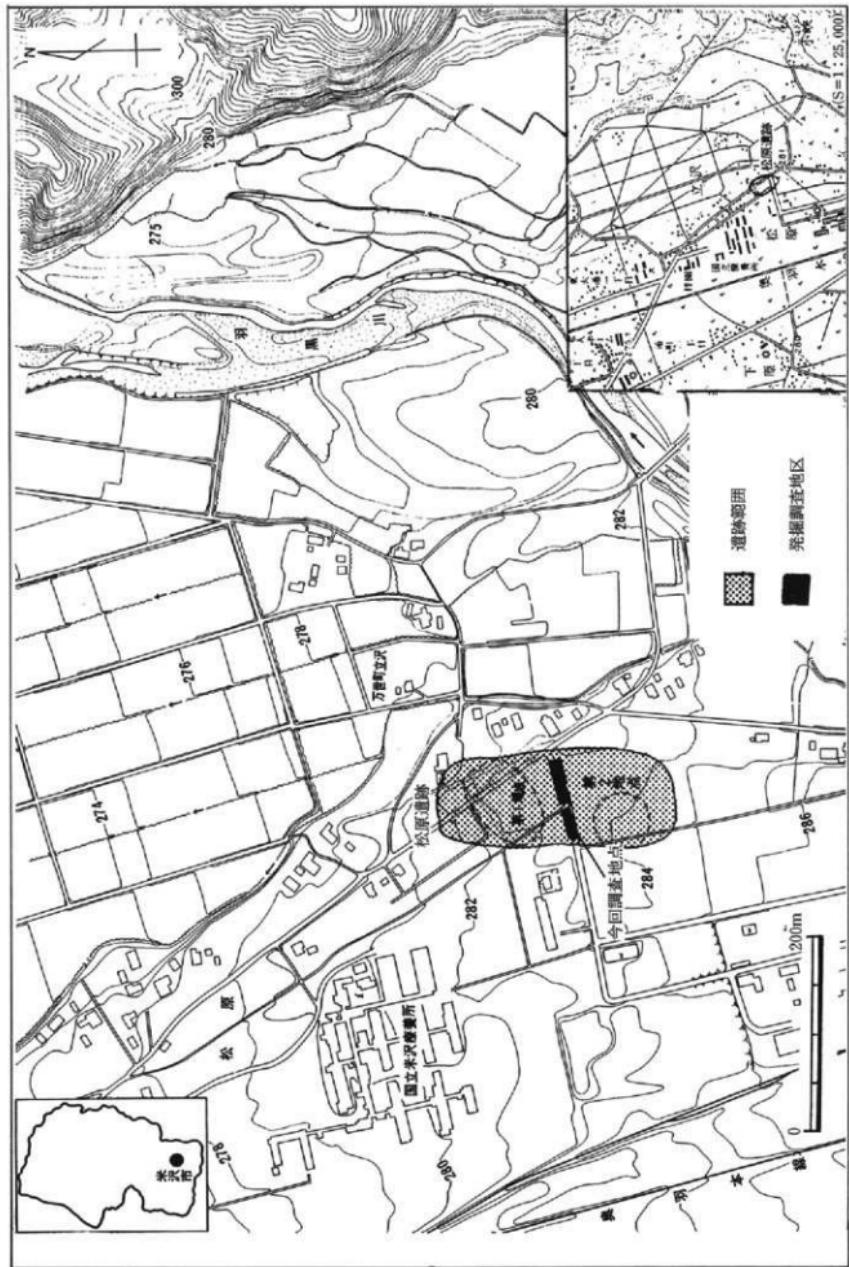
昭和46年の置賜考古学会による発掘調査では、遺物の集中範囲が2地点に分かれることから、農免道路予定地の北側を第1地点、南側を第2地点と区別して呼んでいるが、それに準じれば今回の調査地区は第1地点の延長部に当たると考えられる。

羽黒川流域には、米沢市教育委員会の詳細な分布調査の結果、39遺跡の存在が確認されている。このうち、米沢市でももっとも高地に存在する小屋遺跡（標高750m）を始め元小屋遺跡、蛇ノ口遺跡を含む7遺跡は上流の河岸段丘上に位置し、普門院遺跡、白旗遺跡を含めた15遺跡は標高270~330mにかけて分布する。扇央部から扇状地末端と羽黒川河岸段丘、松川河岸段丘には、松原遺跡や台坂遺跡、花沢遺跡のように比較的大規模な17遺跡が分布している。

羽黒川流域の遺跡群は、上流流域から扇状地の扇央部にかけては、松原遺跡や白旗遺跡が代表するように、縄文早期や前中期といった比較的古い遺跡が存在するのに対し、扇状地末端部に点在する遺跡の多くは、台坂遺跡や花沢遺跡のように、縄文時代でも中期や後期と時期が新しくなる特徴をもつ。

また米沢市内の西側の各河川流域の遺跡分布をみると、羽黒川流域は縄文時代早・前期、松川流域は縄文時代中期、鬼面川流域は縄文時代晚期と、西にいくに従って最初に登場する遺跡の年代が新しくなる特徴をもつ。このことは、扇状地形成の発達が東から西に移行していたことを物語ると理解されている。

II 遺跡の立地と環境



III 検出された遺構

1 遺構の分布（第3図）

昔の人々が、大地に刻み込んだ生活の跡や構築物を遺構といふ。住居跡や貯蔵穴等がこれにあたり、今回の調査では、竪穴住居跡(ST)が確実なもので8棟、土壙(SK)や地面を掘り込んだ性格不明の穴(SX)が約30基発見されている。

住居跡は、地盤の良い東地区の東北部に集中して発見されている。調査地区が幅11mの道路敷に限られているため、完全に検出された住居跡はないが、形は隅丸長方形を呈し、大きさは4~5m位になる。当時の地面を20cmほど掘り込んで床面を作っており、直径20cmほどの柱穴が対になって並ぶ。いくつかの住居跡には、地面が赤く焼けたところがあり、炉の跡と思われる。住居跡の周辺には、直径1mほどの土壙や、直径4mほどの大きな穴が多く検出されている。これらはものを貯蔵したり、廃棄したりするのに用いられたものと思われる。調査区の中央から西地区にかけては、土壙や性格不明の穴がいくつか検出されているが遺構の密度は薄い。

各遺構やその周囲からは、縄文時代前期初頭の土器や石器が出土しており、それ以外の遺物がみられないことから比較的短期間に集落が営まれたものと思われる。

また、西地区からは、7尺間隔の柱穴が一直線に12個みつかっている。この性格については、さらに今後の検討が必要である。

2 遺跡の層序（第4図）

遺跡は、羽黒川による河岸段丘上にあり、本段丘の基盤層はかなり厚い砂礫層からなっている。第4図は調査地区的北側の土層を実測したもので、これをもとに遺跡の基本層序を述べる。

第I層 10YR3/4 暗褐色微砂層

(表土：茅や笹の根が深くまで入り込んでおり、遺物を微量含む。)

第II層 7.5YR3/1 黒褐色微砂層

(砂分がやや多いがしまりがある。腐植土層で、遺物を少量含む。)

第III層 10YR2/1 黒色微砂層

(遺物包含層；通称黒ボクと呼ばれる層で、さらさらしていて炭化物を含む。住居跡や土壙などはこの層から掘り込んだものと考えられる。)

第IV層 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂層

(漸移層；砂分が多く、礫を小量含む。遺物はほとんど含まない。住居跡や土壙などの遺構確認面である。)

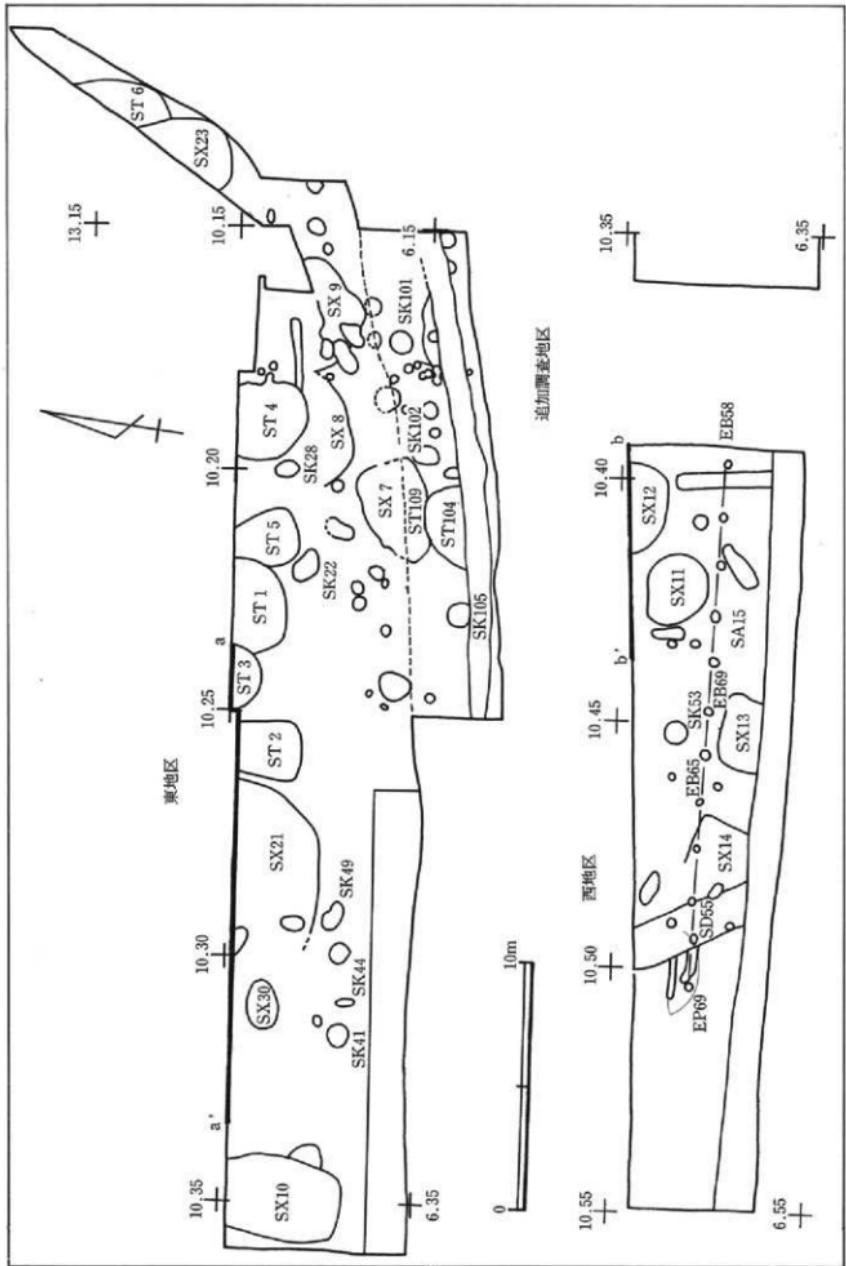
第V層 2.5Y7/6 明黄褐色砂層

(無遺物層；砂分が多く、部分的に大きな礫を含む。)

第VI層 2.5Y5/6 黄褐色砂礫層

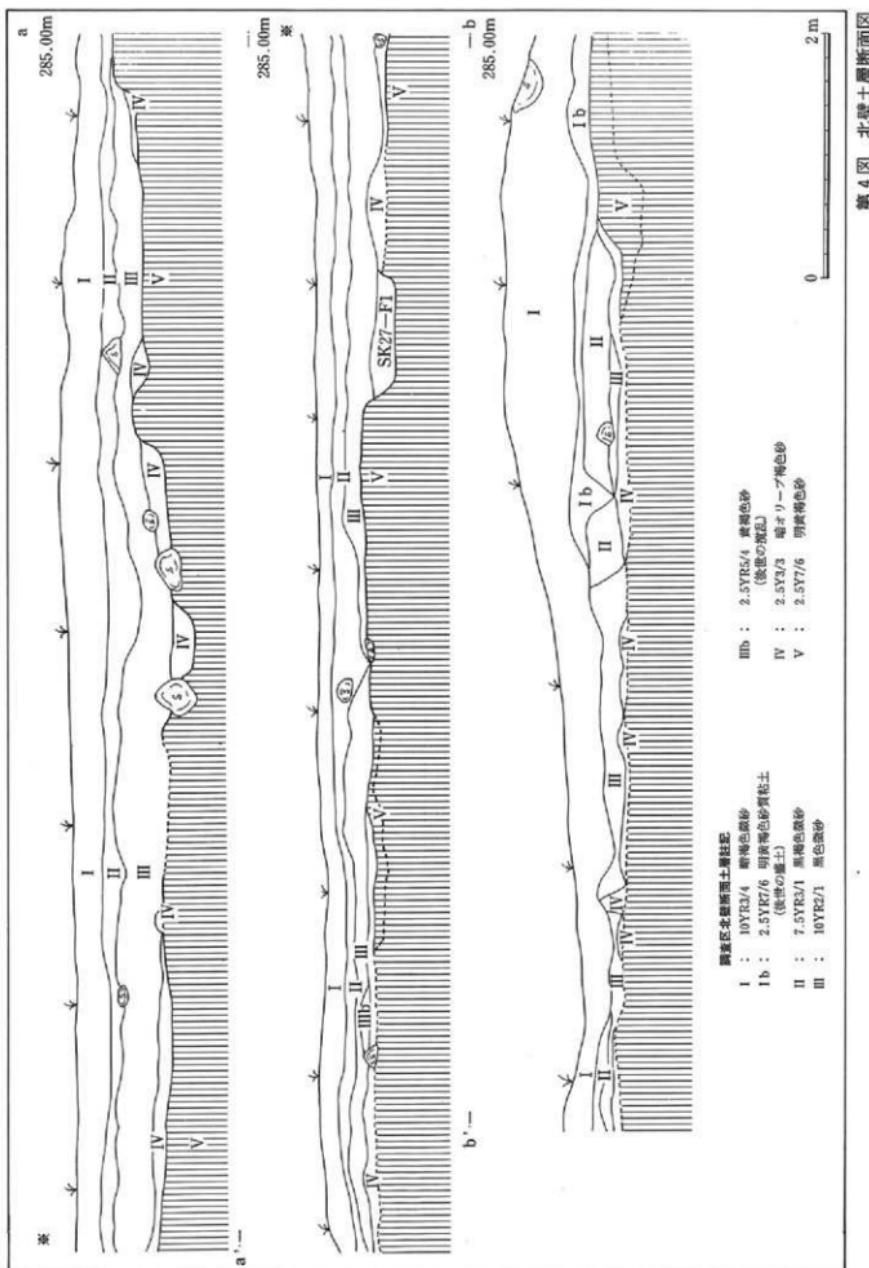
(無遺物層；河岸段丘の基盤をなす層の一部と考えられる。)

III 検出された遺構



第3図 検査区遺構配置図

III 検出された遺構



3 住居跡

(1)ST1・3・5住居跡（第5図、図版5）

東地区中央東寄り22～25・9・10Gで検出された3棟の住居跡である。3棟が重複して検出されたが、平面や断面の切り合い状況からみて、新旧関係は古い方からST5→ST1→ST3の順序になると考えられる。各住居跡とも北側が道路敷外になるため、未発掘となっている。

ST1住居跡は平面プランが不整の隅丸方形を呈し、大きさは東西径4.80m、南北径3.12m以上を測る。基本層序の第III層中から掘込まれたと思われるが、確認出来たのは第IV層上面からである。壁の上面から床面までの高さは最大部で23cmを測る。

柱穴は10個検出されているが、このうちEP71・EP72が主柱穴を構成するものと推定される。床面は東側がほぼ平坦であるが、西側がなだらかに傾斜する。

覆土は4層に分かれ、F2に礫を多く含む。遺物はF1から縄文土器片（第13図2・14）や剝片石器（第14図8・15）、凹石（第15図9）などが小量出土している。また住居跡中央東寄りの床面から石皿（第15図10）が出土しており、当時の住居生活面を裏づける。

ST3住居跡は平面プランが隅丸長方形を呈し、大きさは東西径2.37m、南北径1.30m以上を測る。遺構確認面は第IV層である。壁の上面から床面までの高さは、最大部で24cmを測る。柱穴は4個検出されているが、このうちEP75・EP76が主柱穴を構成するものと推定される。床面はほぼ平坦である。

覆土は3層に分かれ、遺物はF1から縄文土器片（第13図11）、F3から剝片石器（第14図7）、床面から凹石（第15図7）などが小量出土している。

ST5住居跡は平面プランが不整の隅丸長方形を呈し、大きさは東西径2.58m、南北径2.71m以上を測る。遺構確認面は第IV層である。壁の上面から床面までの高さは最大部で14cmを測る。

柱穴は3個検出されているが、このうちEP77～79が主柱穴を構成するものと推定される。床面はほぼ平坦であるが、西半部に礫が多く分布している。

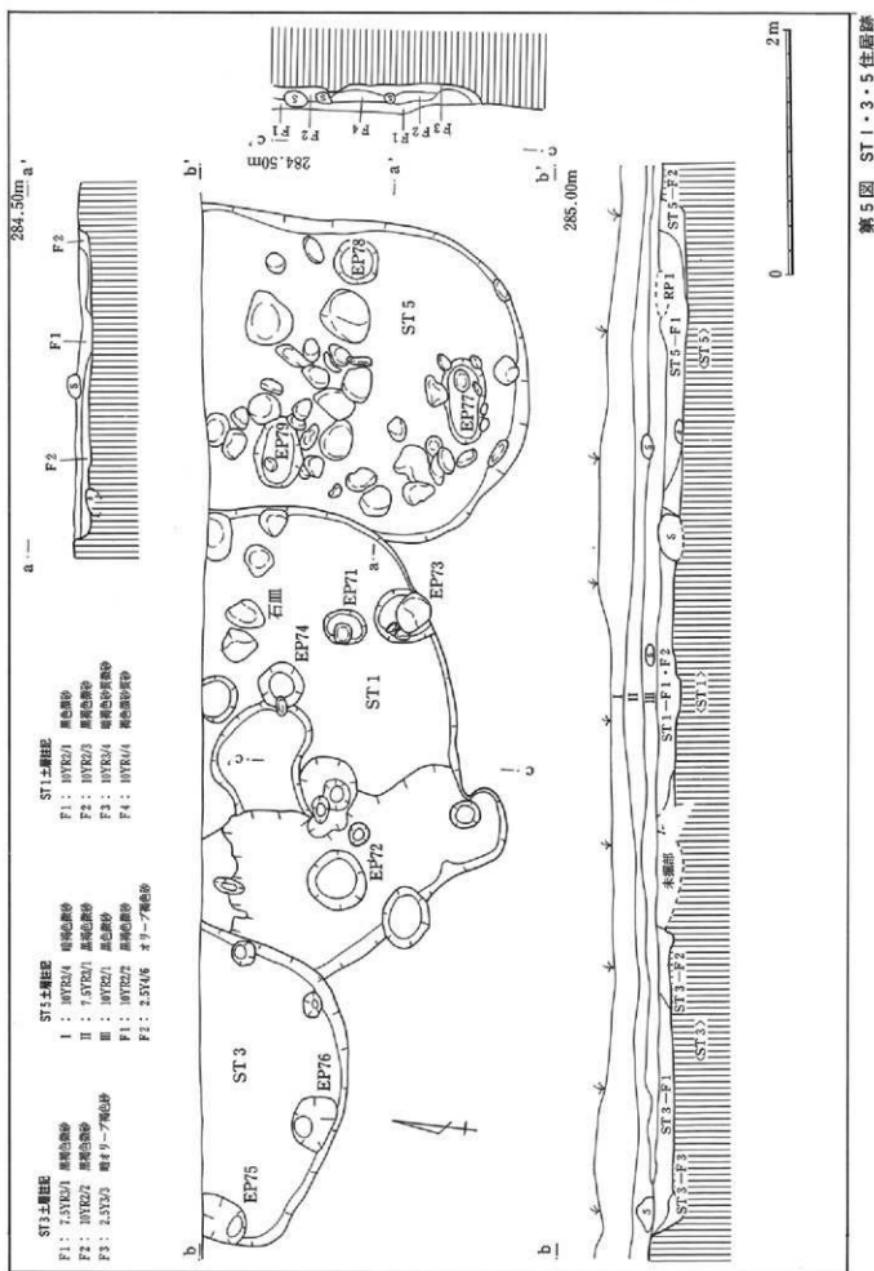
覆土は2層に分かれ、遺物はF1・F2および床面から縄文土器（第12図5・第13図1・3・5・7・8・10・12・13・15～24・26～30・33・34）が多く出土している。またF2や床面から剝片石器（第14図11）や凹石（第15図1）も出土している。このうち第12図5（RP1）はF1の上面から一括して発見されたもので、今回の調査では唯一全体器形がわかる個体である。この周囲には焼土がみられ、ST3住居跡廃絶後の火の使用がうかがえる。

(2)ST2・4住居跡（第6図、図版6）

ST2住居跡は平面プランが不整の隅丸長方形を呈し、大きさは東西径2.55m、南北径2.69m以上を測る。遺構確認面は第IV層である。壁の上面から床面までの高さは最大部で27cmを測る。

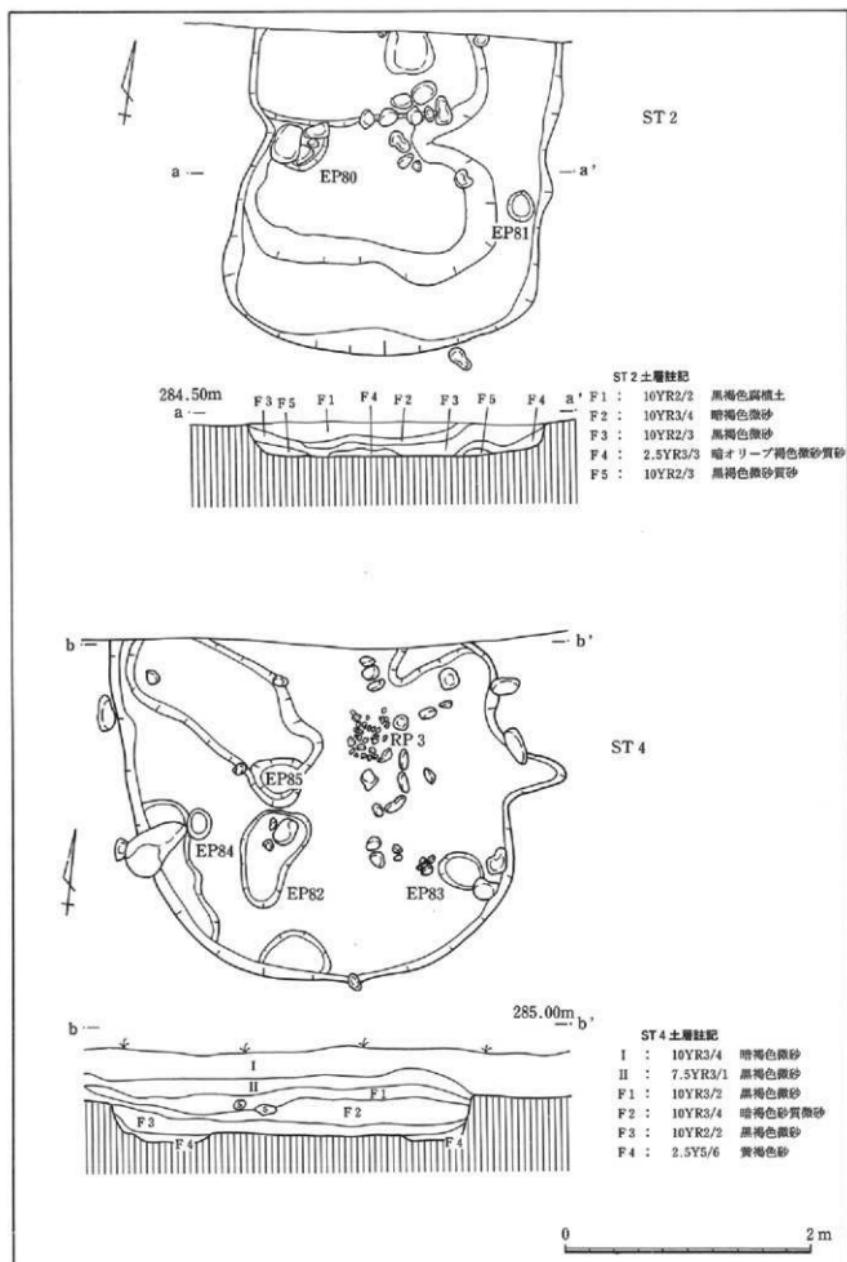
柱穴は2個（EP77・79）検出されており、各々主柱穴を構成するものと推定される。床面のうち南北半部はほぼ平坦であるが、中央から北半部にかけて深さ20～30cmの二ヶ所の

III 検出された遺構



第5圖 ST1・3・5住居跡

III 検出された遺構



第6図 ST 2・4 住居跡

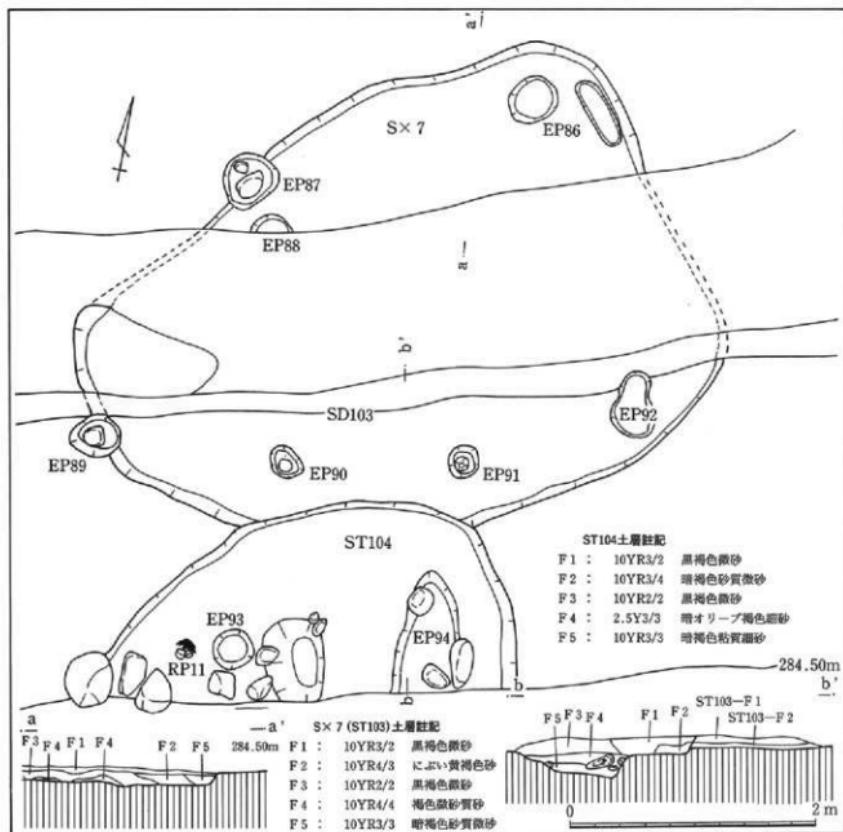
落ち込みがみられる。

覆土は5層に分かれ、遺物はF1・F5から剝片石器（第14図18・19）や凹石（第15図2）が出土している。縄文土器は確認されなかった。

ST4住居跡は平面プランが不整の隅丸長方形を呈し、大きさは東西径2.75m、南北径3.17m以上を測る。壁の上面から床面までの高さは最大部で37cmを測る。

柱穴は6個検出されているが、このうちEP83・84主柱穴を構成するものと推定される。床面はほぼ平坦である。

覆土は4層に分かれ、遺物はF3および床面から縄文土器（第13図4・6・9・25・31・32）、F2・3および床面から石匙（第14図1）や剝片石器（第14図12・20）が出土している。また住居跡中央から縄文土器底部（RP3:第12図3・4）が発見されている。



第7図 ST103・104住居跡

(3) ST103・104住居跡 (第7図、図版8)

追加調査地区中央6~8-20~22Gで検出された2棟の住居跡である。2棟が重複して検出されたが、平面や断面の切り合い状況からみて、新旧関係は古い方からST103→ST104の順序になると考えられる。ST103住居跡北側に、当初東地区でSX7落ち込みとした遺構が検出されていた。南側が水道管の埋設工事によって幅1.5m程破壊されているため、その続きが不明となっていたが、追加調査後の図面照合の結果ST103住居跡と同一遺構となることが判明したのでここで一括して説明する。

ST103住居跡は平面プランが不整の隅丸長方形を呈し、大きさは東西径4.97m、南北径3.70mを測る。遺構確認面は第IV層上面で、壁の高さは最大部で16cmを測る。

柱穴は7個検出されているが、各々が主柱穴を構成するものと推定される。床面はほぼ平坦であるが、西側に10cmほどの落ち込みがみられる。

覆土は5層に分かれ、遺物は床面から縄文土器片が小量、F1から石匙（第14図5）や剥片石器（第14図12）などが出土している。

ST104住居跡は平面プランが不整の隅丸長方形を呈し、大きさは東西径3.53m、南北径1.56m以上を測る。ST104住居跡は南側が道路敷外になるため、未発掘となっている。遺構確認面は第IV層上面で、壁の高さは最大部で18cmを測る。

柱穴はEP931個のみであるが、EP94も柱穴を構成する可能性がある。床面はほぼ平坦であるが、やや西側に傾斜する。住居跡中央西寄りの床面から、縄文土器の体部片を二重に廻した埋設土器様のものが検出された（RP11：図版8中段）。

覆土は5層に分かれ、遺物はF2・3から縄文土器片や石器剥片が微量出土している。

表1 遺構観察表(1)

遺構番号	種 別	検出地区(X-Y) G	平 面 形	主軸方位	規 模 (EW×NS)m	備 考
ST 1	住 居 跡	(9-10-22-24) G	不整隅丸長方形	N45°50'W	4.80×(3.12)	ST 3に切られ、ST 5を切る。第5回
ST 2	住 居 跡	(9-10-26-27) G	不整隅丸長方形	N 3°30'W	2.65×(2.69)	第6回
ST 3	住 居 跡	(10-24-25) G	隅 丸 長 方 形	N151°0'E	2.37×(1.30)	ST 1を切る。第5回
ST 4	住 居 跡	(9-10-19-20) G	不整隅丸長方形	N16°10'E	2.75×(3.17)	第6回
ST 5	住 居 跡	(9-10-21-23) G	不整隅丸長方形	N 6°20'W	2.58×(2.71)	ST 1に切られる。第5回
ST 6	住 居 跡	(12-14-13-14) G	梢 円 形		1.75×(3.75)	SX23に切られる。第8回
SX 8	落ち込み遺構	(8-9-19-21) G	梢 円 形		4.67×(1.50)	
SX 9	落ち込み遺構	(8-9-16-18) G	不整隅丸長方形		3.62×(2.08)	
SX10	落ち込み遺構	(8-10-35-36) G	不整隅丸長方形	N 2°40'E	3.50×(4.83)	第9回
SX11	落ち込み遺構	(9-10-42-44) G	不 整 梢 円 形	N 0°30'E	2.46×(2.98)	第10回
SX12	落ち込み遺構	(10-40-42) G	梢 円 形		3.80×(1.57)	
SX13	落ち込み遺構	(8-45-46) G	隅 丸 方 形	N 4°30'E	2.96×(1.60)	
SX14	落ち込み遺構	(8-9-47-48) G	隅 丸 方 形	N19°40'E	(1.86)×(2.65)	第10回
SX21	落ち込み遺構	(9-10-27-30) G	梢 円 形		(6.20)×(3.66)	
SX23	落ち込み遺構	(11-13-13-15) G	梢 円 形		(2.27)×(4.46)	ST 6を切る。第8回
SX30	縄 層 盛 土	(9-10-31-32) G	梢 円 形		1.84×1.12	
ST103	住 居 跡	(7-8-20-23) G	不整隅丸長方形	N41°20'E	4.97×3.70	ST103に切られる。SX 7と同一住居
ST104	住 居 跡	(6-7-21-22) G	不整隅丸長方形		3.53×(1.56)	ST103を切る。第7回

4 落ち込み遺構

(1) ST6・SX23 (第8図、図版7)

東地区東端11~14-8~10Gで検出された二つの遺構である。ST6遺構は部分的な検出であり、遺物も少ないが、床面に貼床が認められたため住居跡とした。

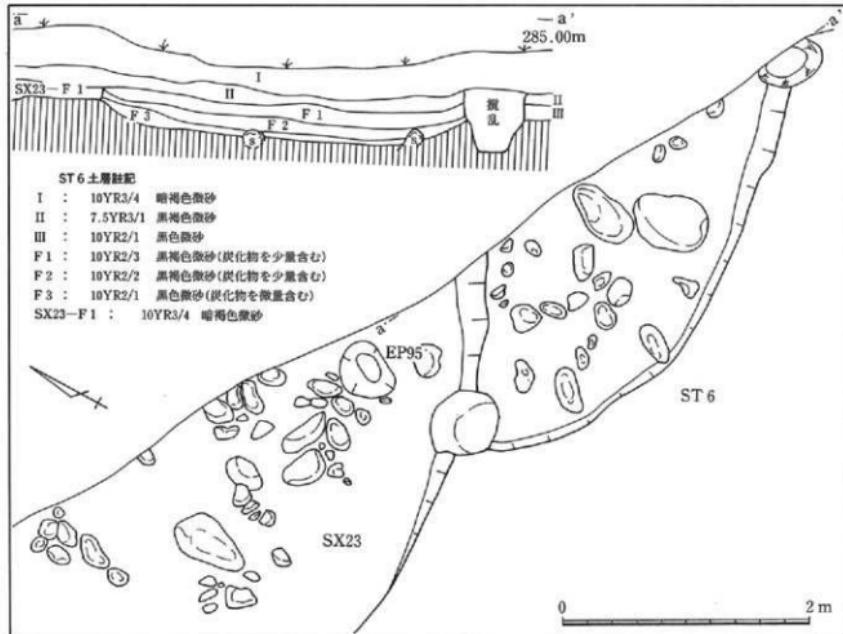
ST6住居跡は平面プランが梢円形ないし隅丸長方形を呈し、大きさは東西径1.75m、南北径3.75m以上を測る。南西部がSX23落ち込みによって切られている。

遺構確認面は第IV層上面で、東南部の壁は後世の削平のため確認が困難であるが、貼床の分布により住居跡の範囲が推定出来る。北壁の土層断面壁の観察では、床面からF1上面までの厚さは最大部で27cmを測る。柱穴は確認されなかった。床面はほぼ平坦であるが西側に10cm程の落ち込みがあり、集石が見られる。

覆土は3層に分かれ、遺物は床面から剝片石器（第14図1）などが微量出土している。

SX23落ち込みは平面プランが梢円形を呈し、大きさは東西径2.27m、南北径4.46m以上を測る。遺構確認面は第III層上面で、東南部の壁は後世の削平のため確認が困難であるが、覆土や礎の分布により遺構の範囲が推定出来る。北壁の土層断面壁の観察では、遺構底面からF1上面までの厚さは最大部で20cmを測る。柱穴はEP95が1個確認されている。

底面はほぼ平坦であるが、集石が多くみられる。覆土は黒褐色微砂の単一土層で、遺物は発見されなかった。



第8図 ST 6 住居跡・SX23遺構

III 検出された遺構

(2) SX10・21 (第9図、図版7)

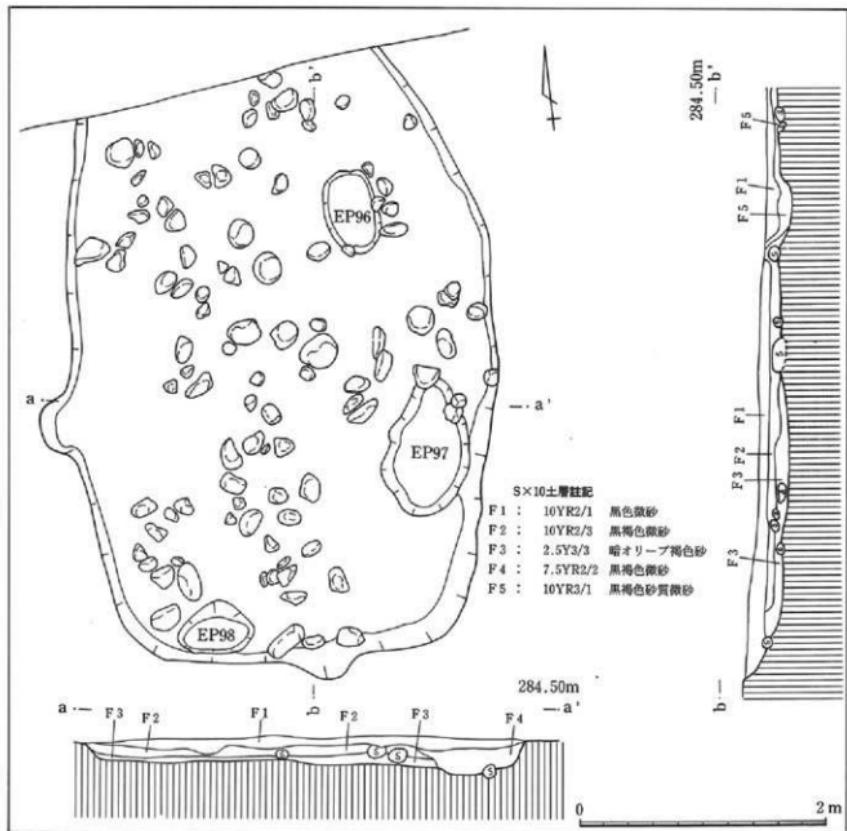
東地区西半7~10-26~36Gで検出された二つの落ち込み遺構である。

SX10は平面プランが不整の隅丸長方形を呈し、大きさは東西径3.50m、南北径4.83m以上を測る。遺構確認面は第IV層上面で北側壁は道路敷外のため未調査になっている。遺構の確認面から底面までの高さは、最大部で21cmを測る。

EP96~98の3個のピットが検出されたが、掘り方はなく柱穴とは考えられない。底面は凹凸がありほぼ全面に集石がみられる。覆土は5層に分かれるが、遺物は認められない。

SX21落ち込みは平面プランが梢円形を呈し、大きさは東西径6.20m、南北径3.66m以上を測る。遺構確認面は第三層下面で、北半の壁は道路敷外のため未調査になっている。

遺構底面からF1上面までの厚さは最大部で28cmを測る。柱穴は検出されなかった。覆土は5層に分かれ、遺物はF3から縄文土器片や石器剝片が微量出土している。



(3) SX11~14 (第10図、図版10)

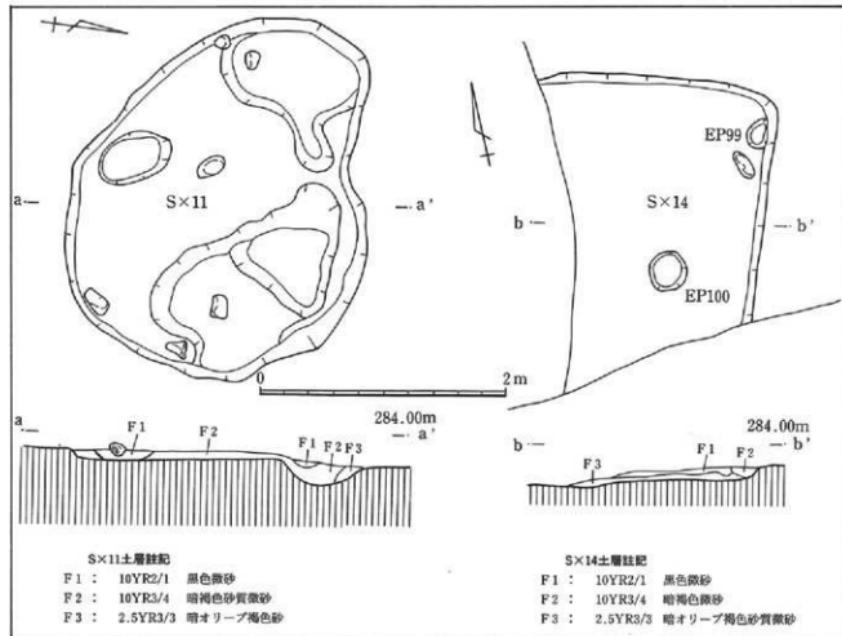
西地区東半8~10~40~48Gで検出された四つの落ち込み遺構である。

SX11は平面プランが不整の楕円形を呈し、大きさは東西径2.46m、南北径2.98mを測る。遺構確認面は第IV層上面で、遺構の確認面から底面までの高さは最大部で14cmある。明確な柱穴ではなく3カ所に掘り込みがみられる。底面は壁近くで凹凸が著しい。覆土は3層に分かれるが、遺物は認められない。

SX12は平面プランが楕円形を呈し大きさは東西径3.80m、南北径1.57m以上を測る。北半が道路敷外のため、未調査である。遺構確認面は第IV層上面で、遺構の確認面から底面までの高さは最大部で20cmある。明確な柱穴ではなく、東側に掘り込みがみられる。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分かれるが、遺物は認められない。

SX13は平面プランが隅丸方形を呈し、大きさは東西径2.96m、南北径1.60m以上を測る。南半が道路敷外のため、未調査である。遺構確認面は第IV層上面で、遺構の確認面から底面までの高さは、最大部で11cmある。柱穴は3個検出されている。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分かれるが、遺物は認められない。

SX14は平面プランが隅丸方形を呈し、大きさは東西径1.86m、南北径2.65m以上を測る。西半がSD55溝跡によって切られている。遺構確認面は第IV層上面で、遺構の確認面から底面までの高さは最大部で10cmある。柱穴は2個検出されている。底面はほぼ平坦で西側にやや傾斜する。覆土は2層に分かれるが、遺物は認められない。



第10図 S×11~14遺構

(4) SX 8・9 (図版6)

東地区中央8・9-16~21Gで検出された二つの落ち込み遺構である。

SX8は平面プランが橢円形を呈し大きさは東西径4.57m、南北径1.50m以上を測る。遺構確認面は第IV層上面で、北側が後世の溝によって切られているため不明である。遺構の確認面から底面までの高さは、最大部で24cmを測る。3個のピットが検出されている。底面は平坦で、やや西側に傾斜している。覆土は3層に分かれ、遺物はF2から縄文土器片や石器剝片が微量出土している。

SX 9は平面プランが不整の隅丸方形を呈し、大きさは東西径3.62m、南北径2.08m以上を測る。遺構確認面は第IV層上面で、北側が後世の溝によって切られているため不明である。確認面から底面までの高さは、最大部で5cmと浅い。柱穴はなく、底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分かれ、遺物はF2から石器剝片が微量出土している。

5 土壌 (第11図、表2、図版10)

今回の調査では竪穴住居跡や性格不明の落ち込み遺構のほかに、各調査区から直径1m前後の土壌も23基検出されている。その計測値や内容については表2の遺構観察表(2)を参照していただくことにして。ここではその概要について説明する。

土壌は、その平面や断面形および覆土と遺物の包含状況等から5類に大別される。

1類：平面が円形で、断面が逆台形を呈するもの。

1類はさらに、(a) 縄文時代の遺物を含むもの(SK28・101)と、(b) 縄文時代の遺物を含まないもの(SK26)に細分される。

2類：平面が円形で、断面が丸味を呈するもの。

(a) 遺物を含むもの(SK51・53)と、(b) 遺物を含まないもの(SK41)がある。

3類：平面が不整の楕円形で、断面が丸味を呈するもの。

(a) 遺物を含むもの(SK44・102)と、(b) 遺物を含まないもの(SK31)がある。

4類：平面が不整の楕円形で、断面の底部が波うつもの。

(a) 遺物を含むもの(SK22)と、(b) 遺物を含まないもの(SK43・54)がある。

5類：平面が隅丸方形で、深さがあるもの(SK105など)。

縄文時代の遺物はなく、疊を含むことから比較的後世のものと思われる。

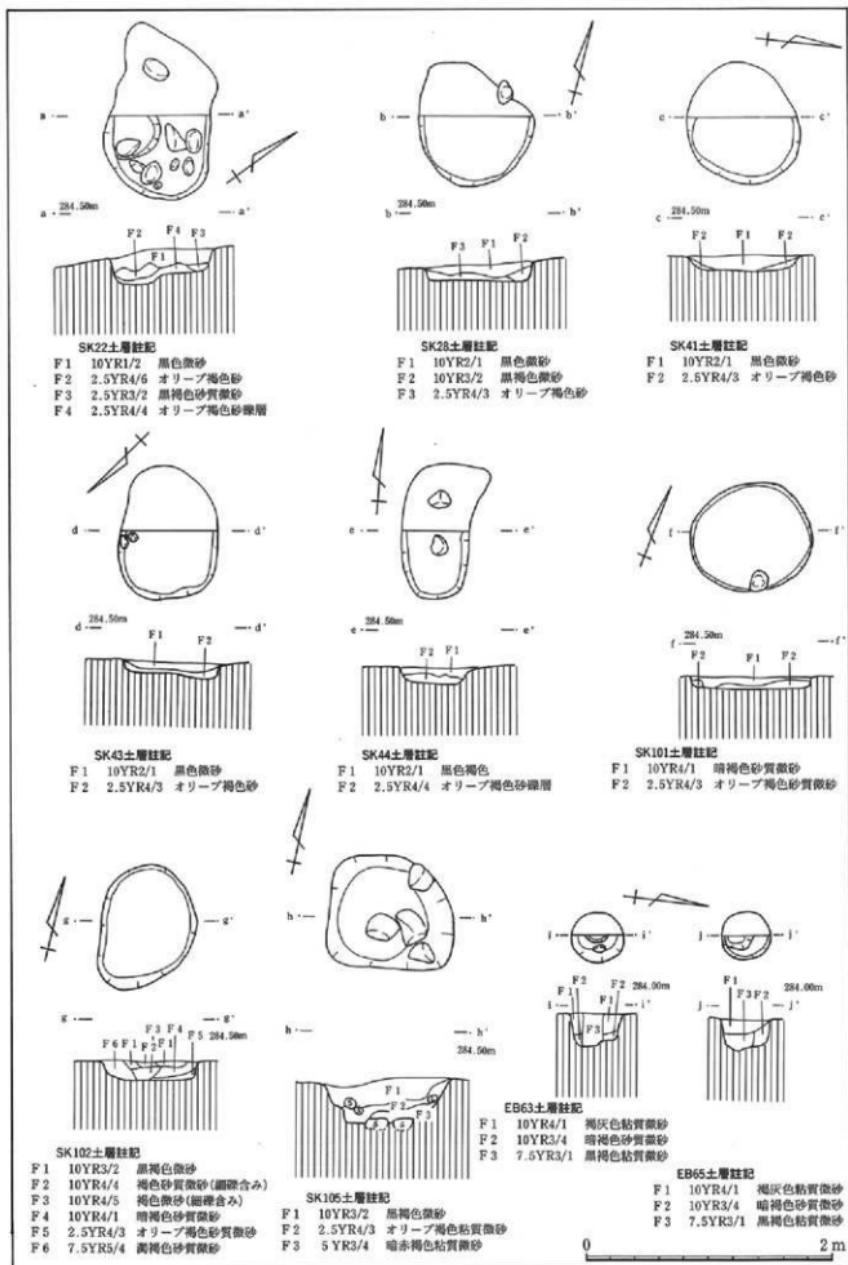
6 掘立柱列 (第3図、図版3)

西地区東半9-41~51Gで、東西方向に延びるSA15掘立柱列が検出された。

遺構確認面は第IV層上面で、12個の柱穴が一直線上に配置されている。柱穴は直径35~45cmの円形を呈し、掘り方と柱アタリが明瞭に識別できる(第11図EB63・EB65)。掘り方の覆土は2層に分かれ、柱アタリの大きさは直径15~18cmである。各柱穴毎の間隔は、ほとんどが2.1m(7尺)等間で、1.5m(5尺)と1.8m(6尺)のものも1ヶ所ずつみられる。各柱穴内からの遺物の出土はなかった。

SA15掘立柱列は少なくとも縄文時代とは関わりがなく後世のものと思われるが、詳細な時期については不明である。

III 検出された遺構



第11図 土 壤

表2 遺構観察表(2)

遺構番号	種別	検出地区(X-Y)G	平面形	主軸方位	規模 (EW×NS)m	最大深さ (cm)	備考
SK22	土 壁	(8-22-23) G	不整円形	N39°W	0.84×1.28	28	第11回
SD24	溝 跡	(9-17~19) G		W230°N	(3.75)×0.43	10	
SK26	土 壁	(9-30) G	円 形		0.75×0.75	18	
SK27	土 壁	(10-30) G	不整円形		1.11×(0.74)	15	
SK28	土 壁	(9-10-20-21) G	不整円形	N55°W	0.85×1.05	17	第11回
SK29	土 壁	(8-9-32) G	不整円形		0.45×0.40	10	
SK31	土 壁	(9-33-34) G	不整円形		0.70×2.50	10	
SK32	土 壁	(8-9-34-35) G	不整円形		(0.87)×(1.48)	10	SX10に切られる。
SK41	土 壁	(8-32) G	円 形		0.90×0.97	12	第11回
SK42	土 壁	(8-30-31) G	円 形		0.81×0.77	20	
SK43	土 壁	(8-9-29-30) G	不整円形	N21°W	0.82×1.07	12	第11回
SK44	土 壁	(7-8-21-22) G	不整円形	N19°20'E	0.56×1.14	14	第11回
SK45	土 壁	(8-17-18) G	不整円形		1.12×0.89	22	
SK46	土 壁	(8-9-18) G	長 柄 円 形		(1.32)×0.72	10	SK47に切られる。
SK47	土 壁	(8-18) G	橢 円 形		0.72×0.54	6	SK46を切る。
SK48	土 壁	(9-15-16) G	円 形		0.66×0.76	4	
SK49	土 壁	(9-14-15) G	不整円形		0.55×0.58	10	
SD50	溝 跡	(8-10-40-41) G	不整円形	N9°50'W	0.64×(3.72)	8	
SK51	土 壁	(7-25) G	円 形		1.01×1.06	7	
SK52	土 壁	(9-10-44) G		N0°10'E	0.45×1.28	7	
SK53	土 壁	(8-9-45-46) G	円 形		0.93×0.93	7	
SK54	土 壁	(10-49) G	長 柄 円 形		(0.73)×0.61	6	
SD55	溝 跡	(8-10-49-50) G		N28°40'W	1.60×(4.63)	4	
SD56	溝 跡	(9-50-51) G		W220°N	(1.57)×0.59	6	SD55に切られる。
SD57	溝 跡	(9-50-51) G		W40°N	(1.85)×0.22	4	SD55に切られる。
SK101	土 壁	(7-18) G	円 形		0.94×0.95	12	第11回
SK102	土 壁	(6-7-20) G	不整円形		0.78×1.03	18	第11回
SK105	土 壁	(6-22-23) G	不整方形	N50°W	1.02×0.93	37	第11回
SA15	獨立柱列	(9-40-51) G	直 跡	W3°50N	(21.40)		
EB58	同上柱穴	(8-40) G	円 形		0.35×0.34	10	
EB59	同上柱穴	(8-9-41) G	円 形		0.32×0.32	17	
EB60	同上柱穴	(8-9-42) G	円 形		0.37×0.36	28	
EB61	同上柱穴	(8-9-43) G	橢 円 形		0.41×0.48	27	
EB62	同上柱穴	(8-9-44) G	円 形		0.40×0.43	23	
EB63	同上柱穴	(9-45) G	円 形		0.41×0.44	23	第11回
EB64	同上柱穴	(9-46) G	橢 円 形		0.37×0.45	32	
EB65	同上柱穴	(9-47) G	円 形		0.40×0.44	27	第11回
EB66	同上柱穴	(9-48) G	橢 円 形		0.38×0.31	21	SX14を切る。
EB67	同上柱穴	(9-49) G	円 形		(0.37)×0.37	13	
EB68	同上柱穴	(9-50) G	円 形		0.38×0.40	20	
EB69	同上柱穴	(9-51) G	円 形		0.37×0.35	13	

IV 出土した遺物

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にして10箱である。内訳は、縄文土器が約6箱、石器が約4箱となり、このほか基準土層のサンプルを1箱分採集した。

1 縄文土器（第13・14図）

明確な遺物包含層がなかったため、住居跡や性格不明の落ち込み遺構の覆土から出土したもののが大半を占める。ST1住居跡から1ヶ所、ST4住居跡から3ヶ所、ST5住居跡から1ヶ所、ST104住居跡から1ヶ所の計6ヶ所で縄文土器が纏って出土したが、細片が多く、復元出来た土器は底部のみのものも含め3点だけである。これらの土器を、胎土、器形、文様構成、施文具に分けて観察を行う。

(1)胎土・器形

胎土には、繊維、石英、長石、黒雲母などを含む。内外面ともよく磨かれており、焼成も比較的良い方である。器厚は、7～8mmのものがもっとも多い。

器形が明確にわかるものは、大型の深鉢（第13図3）1点のみである。口縁部が直線的に開き、そのまま底部にそぼまるものと思われる。このほか口縁部が外反し、体部で幾分丸みを持つ深鉢もみられる。口縁は、平縁と波状口縁のものがあり、刻み目を有するものもみられる（第14図1）。口縁部の断面は、角張った感じのものが多いが、第14図2のように内側がそがれたものもある。

底部は3点確認されており、すべてが上げ底となっている。

(2)文様構成

文様の分類にあたっては今回の調査による出土資料を中心とし、昭和46年の置賜考古学会による発掘調査資料も一部加味した。

〈口縁部文様〉

1群：平坦口縁で、口辺部に対し沈線文及び原体L、R交互の蕨状捺糸圧痕文を平行に施し、これに竹管による刺突文が加わるものである（第14図1）。

2群：波状口縁ないし平縁に沿って竹管文が施されているもので、その施文方法は1群とよく似ている（第14図2～4・36・37）。

3群：あらかじめ菱形や三角形に素描を行い、その部分を除いて縄文を施し、最後にその境界線に沈線文を施しているもの（同図35）。

4群：平縁が一般的で、縄文を施しているグループ。さらにどのような原体を使用しているかによって幾つかに細分できる。

1類（第14図7・10～13）結束の有る羽状縄文が施されているグループ。

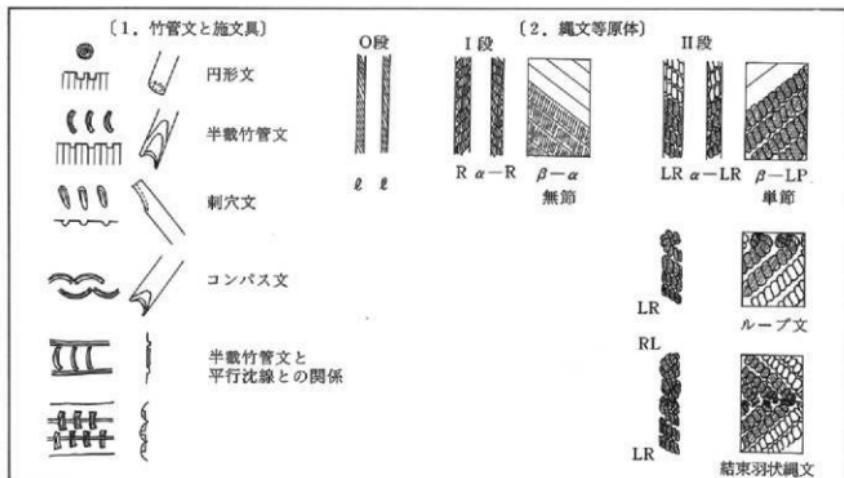
2類（第14図6・8・9）結束の無い羽状縄文が施されているグループ。

3類（第14図17～34）ループ文が施されているグループ。

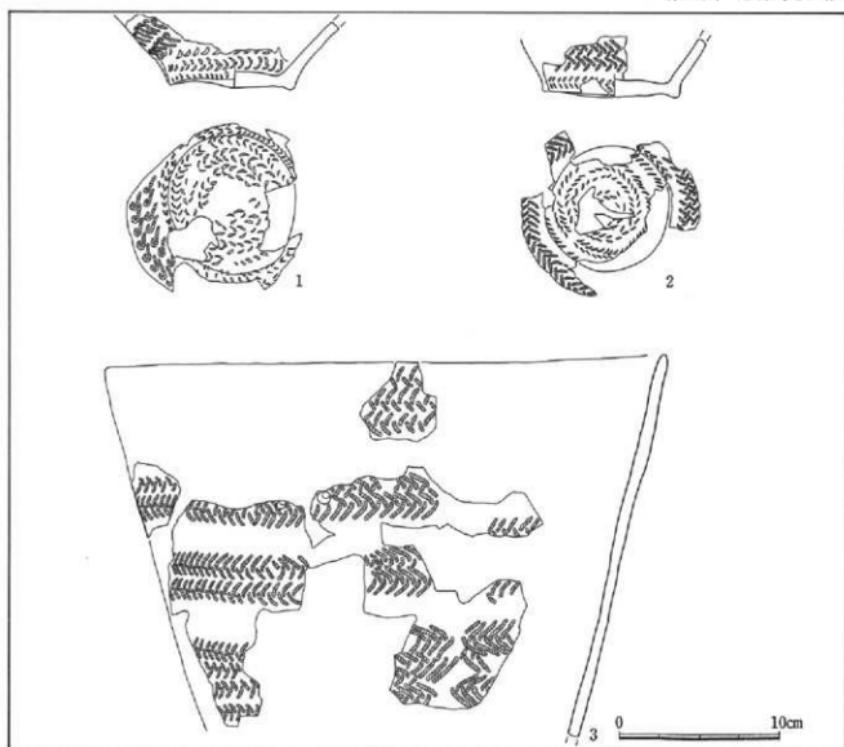
4類（今回未検出）捺糸文が施されているグループ。

〈体部文様〉

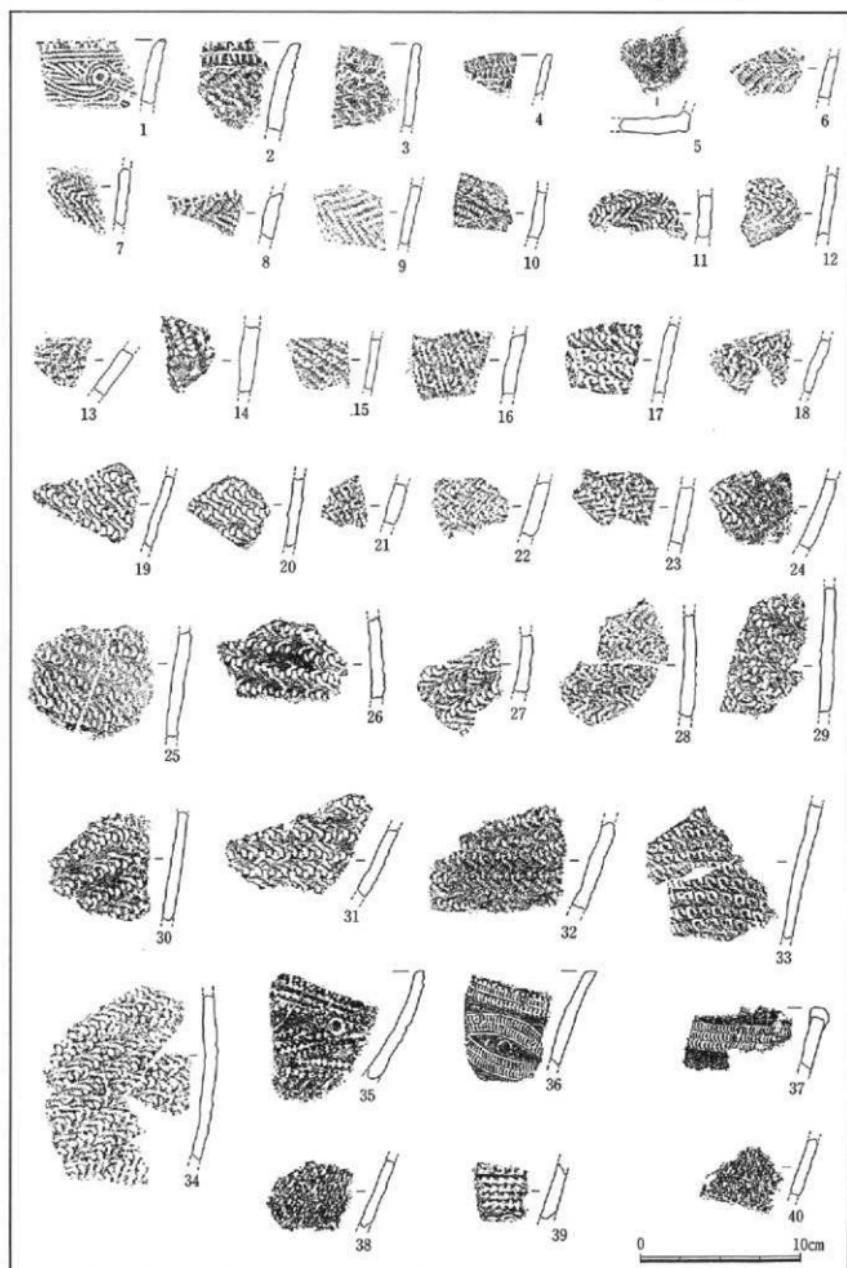
IV 出土した遺物



第12図 原体等模式図



第13図 繩文土器(1)



第14図 繩文土器(2)

体部の文様を観察すると、半截竹管文が施されているものは例外的で、その多くは口縁部文様4群の文様が施されている。また第13図3のように体部に2～3条の無文帯を有するものもある。中でもループ文が施されているグループがもっと多く、次いで結束の有る羽状繩文が施されているグループが続く。斜繩文は1点それらしきもの（第14図15）があるだけで非常に少ない。

〈底部文様〉

土器の底部とその立ち上がり部分には、体部と異なった文様が施されることが多い。

第13図1・2は、横「ハ」の字の半截竹管文が底部に同心円状に施されており、底部の立ち上がり部分にも2～3段に施されている。このほか46年調査では、結束の無い羽状繩文が施されている底部も出土している。

(3)施文具及び繩文原体（第12図1・2）

文様を施す道具については、秦昭繁氏による文様復元により、從来刺突文とされていたものを含め、円形文、半截竹管文、コンバス文、平行沈線文などがすべて竹管によって施文できることがわかった。第12図1にその概要を記す。とくに、半截竹管と平行沈線の相互関係の中で、平行沈線の上に連続した半截竹管文を施したもの（第14図39；46年調査資料）は注目される。

繩文原体については、1段、2段、末端に環（ループ）の付いた繩及び結束の有る羽状繩文と結束の無い羽状繩文の復元を図化した（第12図2）。

2 石器（第15・16図）

石器の出土状況も、繩文土器と同じく住居跡や性格不明の落ち込み遺構の覆土から出土したもののが大半を占める。

(1)打製石器（第15図）

石材はすべて珪質頁岩で、定形化された石器として石匙が5点、石錐が1点出土した。このほか調整痕がある不定形石器が7点、片石が17点出土している。

①石 鍔：つまみを持つナイフで、形態等から二つに分けられる。

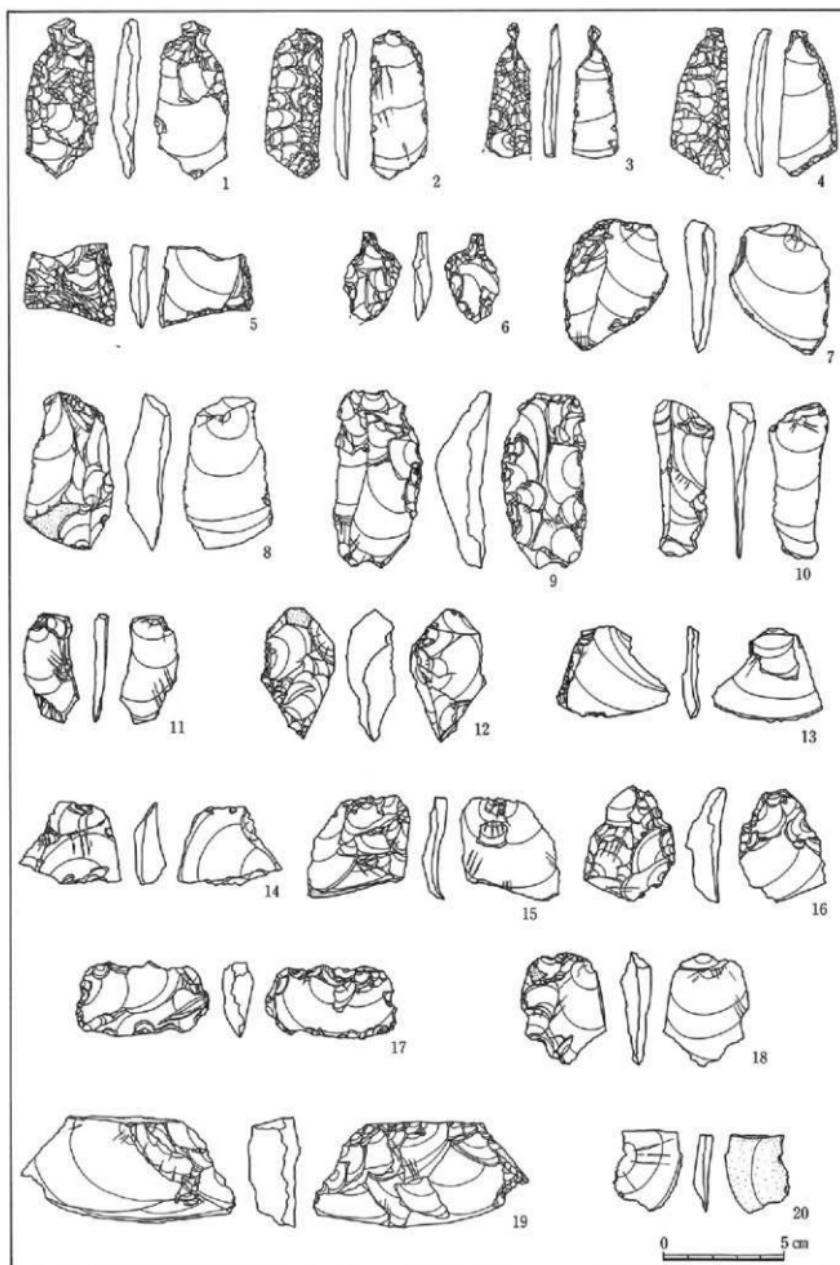
a. 縱形でつまみを有し、刃部は「く」字形に曲がる形態をしているもの。打面の一部をそのまま残し、打面に近い方につまみを作る。背面の右側縁辺にそって調整剝離があり、この調整剝離面を打面として、正面に押圧剝離をしている。4点出土している。（第15図1～4）。

b. つまみの作り出しがないが、刃部の形態が1と同じ特徴を有するもの（同5）。

②石 錐：尖頭部を棒状に加工し、錐部の断面形を菱形ないし三角形に作り出した形態をしいる石器。第15図6は尖頭部が欠損しているがこれにあたり、基部はリタッチが少なくつまみ状を呈する。

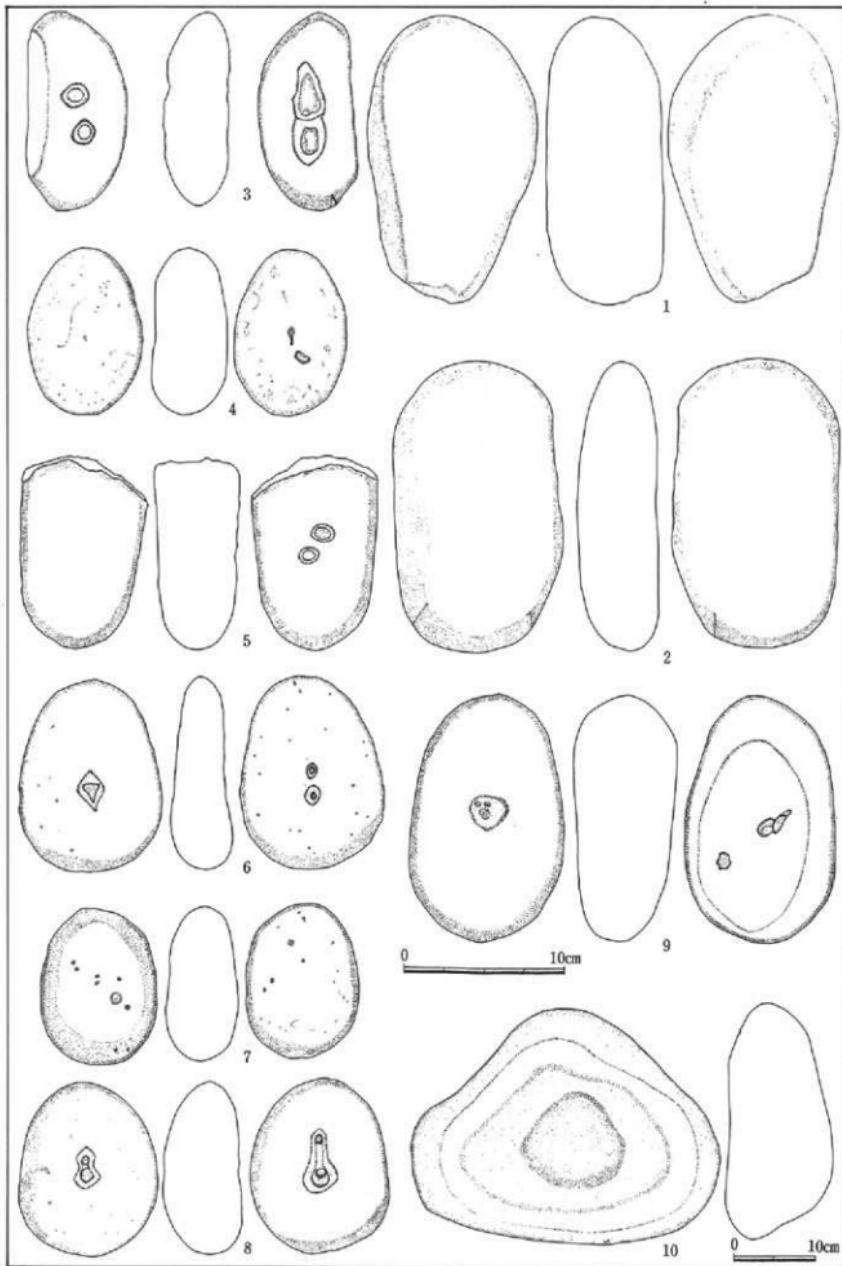
③不定形石器：二次的な調整剝離がある剥片を一括して不定形石器と分類した。形態や調整剝離のあり方等から三つに分けられる。

a. ほぼ全縁辺に調整剝離があるもの（第15図9）。



第15図 石器(1)

IV 出土した遺物



第16図 石 器(2)

b. 剣片の側縁辺に調整剝離があるもの（第15図7・13・16・17）。

c. 剣片に1～2回の調整剝離があるもの（第15図10・11・15・19）。

- ④石 片：石器製作の過程で、母材の石塊から打ち削がされたもので、これまでのどの分類にも属さないものを石片とする。これには剣片、チップがある。（第15図20）。

(2) 磨製石器（第16図）

磨製石器として区分できるものに石皿、磨石、凹石があり、合計11点出土している。石材には、安山岩、凝灰岩、泥岩がある。

- ⑤石皿：ST1住居跡の床面から1点出土している。人頭大の安山岩の片面に円形ないし橢円形の二重の窪んだ研磨面を有するもので、一方向が斜面になっている（第16図10）。

- ⑥磨石：橢円形や球状の自然礫を利用して、2～4ヶ所の平坦な研磨面を有するもので、ST2住居跡から1点（第16図2）、ST5住居跡から2点（同1）遺物包含層から1点の計4点が出土している。石材はすべて安山岩である。

- ⑦凹石：自然礫の表裏面に窪みを有するものを一括してこのグループに含める。ST1住居跡から1点（第16図9）、ST2住居跡から1点（同4）、ST3住居跡から1点（同7）、遺物包含層から4点（同3・5・6・8）の合計7点が出土している。

形態は（a）橢円形のものと（b）長橢円形のものとがあり、凹みも1個のものと2個連続しているものがある。凹石は磨石と密接な関係をもつと思われるが、今回の調査では凹石は磨石に対し比較的小形のものが多い。石材は安山岩、凝灰岩、泥岩の3種類がある。

表3 石器觀察表

番号 番号	形 態	出 土 位 置	法 盤(cm)		重 き (g)	周 囲 面		材 質	分類
			長 辺	短 辺		正 面	背 面		
14-1	石 皿	ST4-F2	6.5	2.9	0.8	19.2	全体	磨 石	珪質岩質
14-2	石 皿	10-21II層	6.1	2.2	0.5	9.5	全体	磨 石	珪質岩質
14-3	石 皿	ST4-F3	5.4	1.8	0.5	4.5	全体	磨 石	珪質岩質
14-4	石 皿	10-30II層	6.0	2.4	0.6	9.7	全体	磨 石	珪質岩質
14-5	石 皿	SX7-F1	3.2	3.8	0.6	9.8	全体	磨 石	珪質岩質
14-6	石 皿	10-21II層	3.6	2.1	0.6	5.6	全体	磨 石	珪質岩質
14-7	不定形石器	ST5-F3	5.7	4.0	1.2	21.1	橢円形	磨 石	矽質岩質
14-8	不定形石器	ST1-F3	6.2	3.5	1.5	32.9	打 面	磨 石	矽質岩質
14-9	不定形石器	ST2-F5	7.1	3.3	1.6	38.7	打 面	磨 石	矽質岩質
14-10	不定形石器	ST6-F1	6.3	2.5	1.1	10.1	歯 面	磨 石	矽質岩質
14-11	不定形石器	ST5-Y	4.5	1.9	0.5	4.6	歯 面	磨 石	矽質岩質
14-12	不定形石器	ST4-Y	5.4	2.8	1.8	28.4	歯 面	磨 石	矽質岩質
14-13	不定形石器	SX7-F1	3.8	4.5	0.5	8.0	歯 面	磨 石	矽質岩質
14-14	不定形石器	12-13II層	4.2	3.3	1.0	15.3	歯 面	磨 石	矽質岩質
14-15	不定形石器	ST1-F3	5.3	3.8	0.7	10.3	打 面	磨 石	矽質岩質
14-16	不定形石器	10-16-20II層	4.5	3.5	1.4	17.7	歯 面	磨 石	矽質岩質
14-17	不定形石器	8-33I層	5.4	2.9	1.0	19.4	歯 面	磨 石	矽質岩質
14-18	不定形石器	ST2-F5	4.5	3.3	1.1	13.9	歯 面	磨 石	矽質岩質
14-19	不定形石器	ST2-F2	5.2	4.3	1.6	61.9	打 面	磨 石	珪質岩質
14-20	石 片	ST4-F1	3.2	2.4	0.6	4.9	無	磨 石	珪質岩質
15-1	磨 石	ST5-F2	17.3	19.3	7.0	1959	研磨面あり	研磨面あり	安山岩
15-2	磨 石	ST2-F2	17.7	19.1	5.3	1550	研磨面あり	研磨面あり	安山岩
15-3	石 片	10-21II層	12.3	6.0	4.0	390	凹 部	あり	研磨面あり
15-4	石 片	ST2-F1	12.0	7.1	4.4	319	凹 部	あり	研磨面あり
15-5	石 片	9-23II層	11.6	7.3	4.8	709	研磨面あり	凹 部	あり
15-6	石 片	9-26II層	11.8	8.7	3.2	255	凹 部	あり	赤色絶滅岩
15-7	石 片	ST3-Y	9.5	7.0	4.3	284	凹 部	あり	研磨面あり
15-8	石 片	10-21II層	16.0	8.3	4.6	540	凹 部	あり	安山岩
15-9	石 片	ST1-F1	15.1	9.4	5.8	1220	凹 部	あり	安山岩
15-10	石 片	ST1-Y	37.8	28.6	12.4	19600	全体	磨 石	安山岩

V まとめ

1 遺構について

今回の調査によって松原遺跡からは、竪穴住居跡が部分的な検出も含め8棟、落ち込み遺構が10基、土壙が23基、溝跡が5条、掘立柱列が1条発見された。時期的には、遺物の節で後述するように、縄文時代前期初頭の極めて短期間に限定出来る。

これらの遺構は、層位的には第III層中から掘り込んでいると推定されるが、実際に確認出来たのは第IV層上面からである。

竪穴住居跡及び縄文時代の遺物を伴う土壙は、調査区のうち東地区東半とその南側にある追加調査地区から集中して検出された。これは河岸段丘の形成による疊層が西地区にいくほど浅く露出しているのに対し、東地区東半には黄褐色の砂層が安定して堆積していることにも起因していると思われる。

竪穴住居跡は部分的な検出が多く、住居跡全体の構造がわかるものは少ないが、平面形が隅丸長方形を基本とし、長軸の長さは4～5mを測る。壁の上面から床面までの高さは20cm前後である。床面は比較的安定しているが、所々に基盤の疊が顔を出している。貼床はST6住居跡を除き顕著でない。炉はST104住居跡の埋設土器の周囲と、ST5住居跡の覆土上面に焼土がみられただけで、明確な地床炉は認められない。主たる柱穴の配置はST103住居跡がよい資料となる。桁行方向に3個の柱穴がほぼ対称に二列並び、その中央に棟持柱が2～3個存在する。

松原遺跡と同じ縄文時代前期初頭の竪穴住居跡の復元構造例としては、岩手県二戸市中曾根II遺跡が参考となる。平面形は隅丸長方形で、柱配置は3間×2間、床面中央に棟持柱を持つ形式である。大きさが長軸約14mと大規模な点を除けば松原遺跡の各住居跡と類似する。

SXとした落ち込み遺構は、調査区のほぼ全域に分布する。大きさは長軸3～6mまで平面形も梢円形から隅丸方形まで様々である。性格については不明な点が多いが、土壙の大きなものや風倒木、あるいは遺物包含層の自然的な落ち込み等が考えられる。

土壙は平面や断面形から5類に分けたが、縄文時代の遺物を伴い覆土が安定している土壙は、住居跡に関連するものと思われる。

松原遺跡全体の集落については、46年度調査の成果を合わせても数が少なく、遺構や集落配置まで言及できる資料はない。ただし松原遺跡の主体部は、今回の調査区の北側雜木林から以前置賜考古学会が調査した民家周辺になるとは言えそうである。縄文時代の集落は、地形等からみて河岸段丘に沿って弧状に並ぶ可能性がある。

ところで縄文時代前期初頭という時期は、同じ米沢市で最近注目されている一の坂遺跡とほぼ同じ頃になる。一の坂遺跡では、40mを超すロングハウスや連房式の竪穴住居跡が発見されている。時期は松原遺跡よりやや古くなりそうであるが、今後石器の原材料の有無や集落間の比較検討を行っていく必要がある。

2 遺物について

(1)松原遺跡出土の縄文土器群について

置賜考古学会が昭和46年に実施した松原遺跡の発掘調査では、調査区ほぼ全域の第2層とした遺物包含層から整理箱約6箱分の縄文土器が出土し、幾つかの分析をもとに、「同層位より出土したもので、同時的存在と考えられるもの」としたうえで、これらの土器群を「松原式」と仮称した。器種はすべて深鉢で、主たる装飾文様としては、(1)末端ループ文、(2)燃糸状痕文、(3)竹管文、(4)羽状縄文がある。

今回の調査区は昭和46年調査区の南方50mと近接した場所に位置し、遺物の出土層位も同じことから、出土した縄文土器群は昭和46年調査のものと近似する。ただし縄文土器が遺構内からまとまって出土したことにより、器種や装飾文様のバリエーションが少なく、装飾文様としては底部の「ハ」字状竹管刺突文を除き、ループ文が多数を占める。

またループ文に無文帯が伴う深鉢もある。

「松原式」を仮称した秦昭繁氏は、その編年の位置を大きくは縄文時代前期初頭としたうえで、その並行関係を東北地方南半では上川名式に後続する「桂島式」とし、竹管文と燃糸状痕文が共伴することから関東地方においては関山式直前の「ニツ木式」に求めた。

近年相原淳一氏は、「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」の論考（相原1990）の中で、上川名式を5階層に分け、松原遺跡出土の土器群を宮城県川崎町前田遺跡や福島県小高町宮田貝塚III群土器と同時期としたうえで、その4階層目に位置付けた。東北地方南半では「桂島式」に後続し、関東地方では「関山I式」に平行するものとしている。

ここでは松原遺跡出土の縄文土器群の編年の位置を、相原氏の論考を参考にしながらも燃糸状痕文+羽状縄文+竹管文+ループ文が分離できる資料がまだ不明確なことを踏まえ宮城県前田遺跡や福島県宮田貝塚III群土器に並行するものとだけとしておく。

(2)松原型石匙について

秦昭繁は、松原遺跡出土石器の分析から、背面に打面となる調整剝離を施し、その面から正面に調整剝離を施している石匙を「松原型石匙」と概念化した。その分布は北海道から東北地方まで、時期的には縄文時代早期末葉か同前期前葉に限定されるという。

今回の発掘調査で発見された5点の石匙も、基本的には綫長剥片を用い、背面に正面の押圧剝離が深く入るための調整剝離を施している。

参考文献

- (1)置賜考古学会：『松原』1977年
- (2)鈴木公雄編：『縄文人の生活と文化』古代史復元2 1988年
- (3)相原淳一：『東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年』考古学雑誌第76巻第1号 1990年
- (4)秦昭繁：『東日本の特殊な技法を持つ石匙』考古学雑誌第76巻第4号 1991年

報告書抄録

ふりがな	まつばらい めきはくつちょうき ほうこくしょ							
書名	松原遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	佐藤庄一・黒坂広美							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301							
発行年月日	西暦1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
松原	山形県米沢市大学関根字白旗・松原	6202	1180	37度 52分 42秒	140度 8分 48秒	19930621～ 19930901	604	県農免道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松原	集落跡	縄文時代 前期初頭	竪穴住居跡 土壙 溝 その他 落ち込み・柱穴など	8棟 23基 5条	縄文土器・石匙・石錐・石皿・磨石・凹石・剝片	縄文時代前期初頭「松原式土器」の追加資料		
		時期不明	柱列	1条				

図 版

図版 1



遺跡遠景(南から)



東地区発掘調査状況

図版2



西地区遺構検出状況



追加調査地区発掘調査状況

図版 3

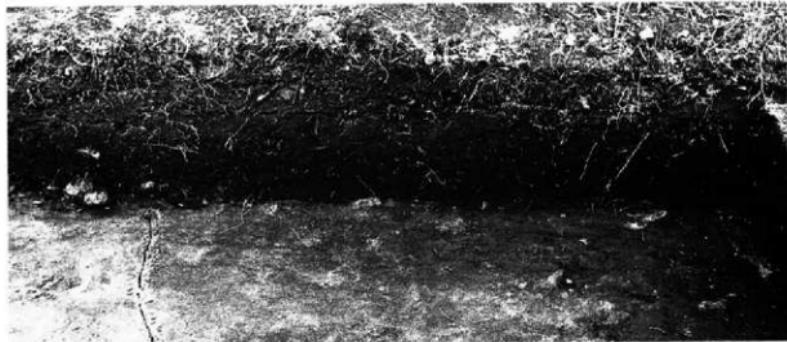


東地区遺構全景(手前ST 4)



西地区遺構全景

図版 4



10-28・29東西土層断面(手前S×2)



10-30~32東西土層断面



10-40~42東西土層断面(手前S×12)



ST 1・5 全景(南から)



ST 1 全景



RP 2 出土状況(ST 1)



ST 5 全景



ST 5 東西土層断面

図版6



ST 2 全景(南から)



ST 4 全景(南から)



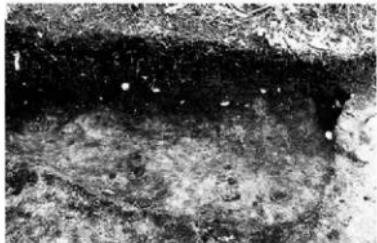
ST 4 南北土層断面



RP 3 出土状況(ST 4)



ST 4・S×8 全景(西から)



ST 3 全景



ST 3 東西断面(南から)



ST 6・S×23全景



S×10全景

圖版 8



ST103・104全景



ST104全景



RPII出土状况(ST104)



ST103・104南北土層断面



ST104南北土層断面(東から)

図版 9



ST 1 東西土層断面



ST 2 挖り下け状況



RP 7 (ST 4) 出土状況



SX 8 東西土層断面(東から)



SX 7 全景

図版10



S×II全景



S×I4全景



SK42・43全景



SK44東西土層断面



追加調査地区全景



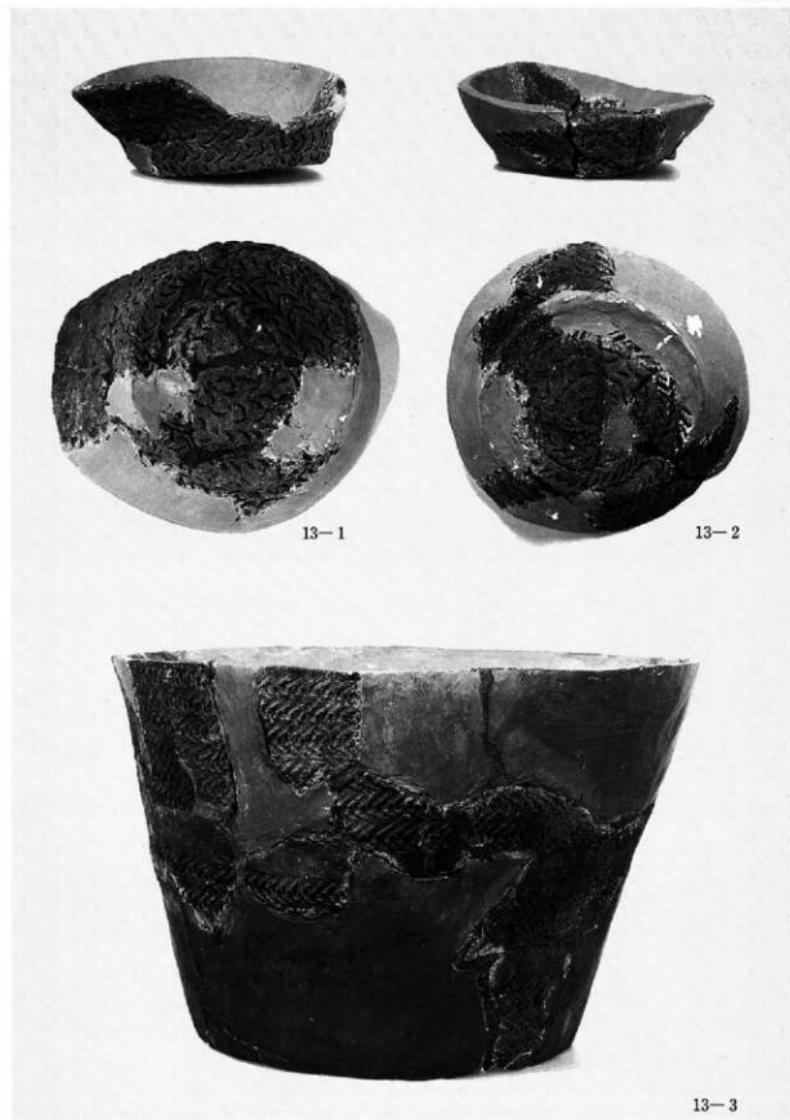
SK101全景



SK102土層断面

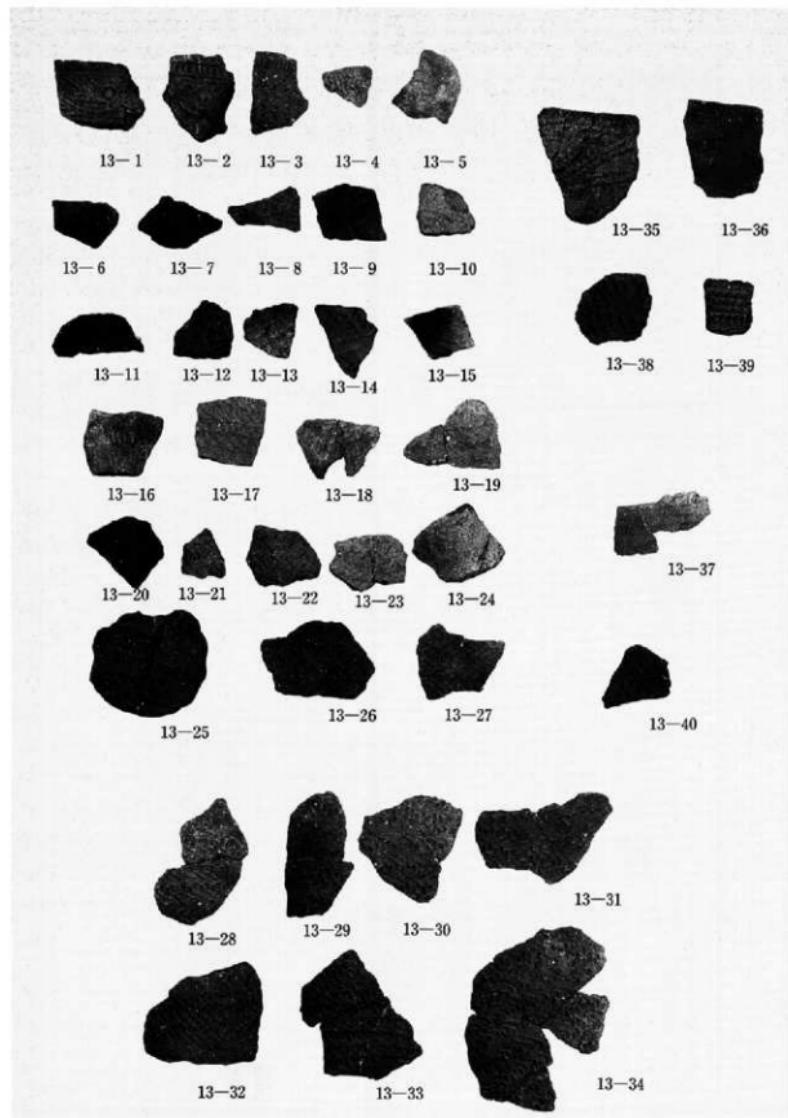


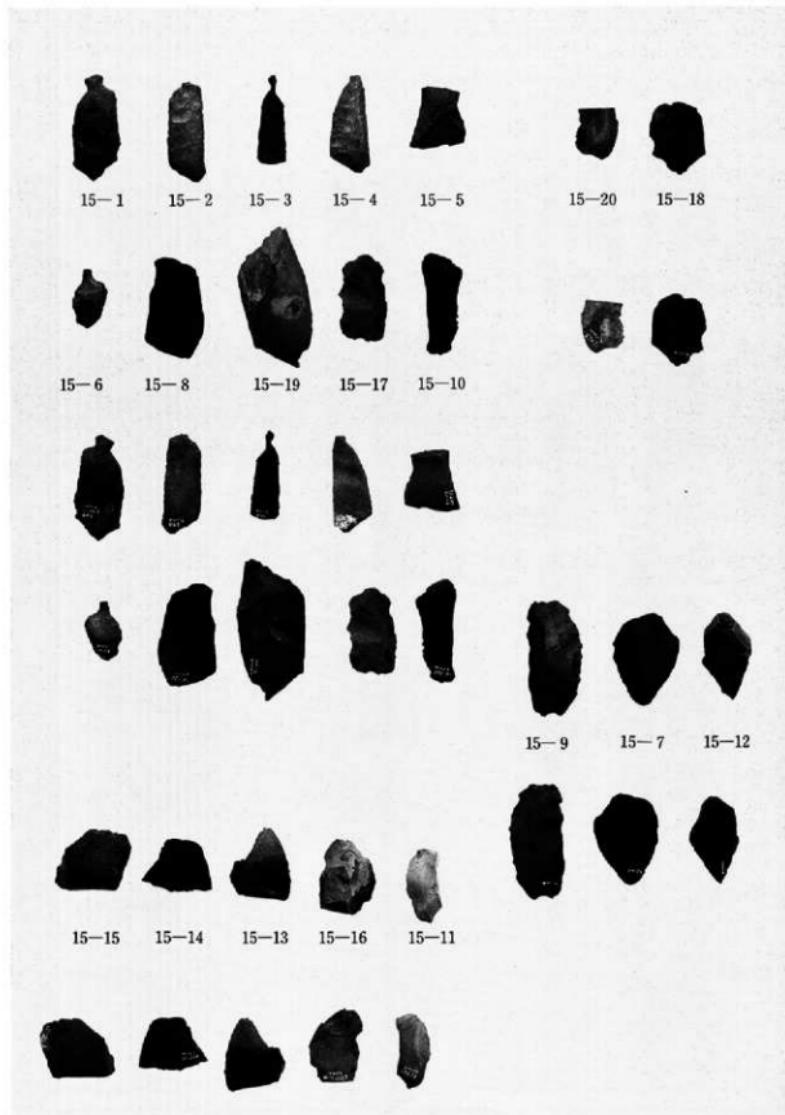
SK105土層断面



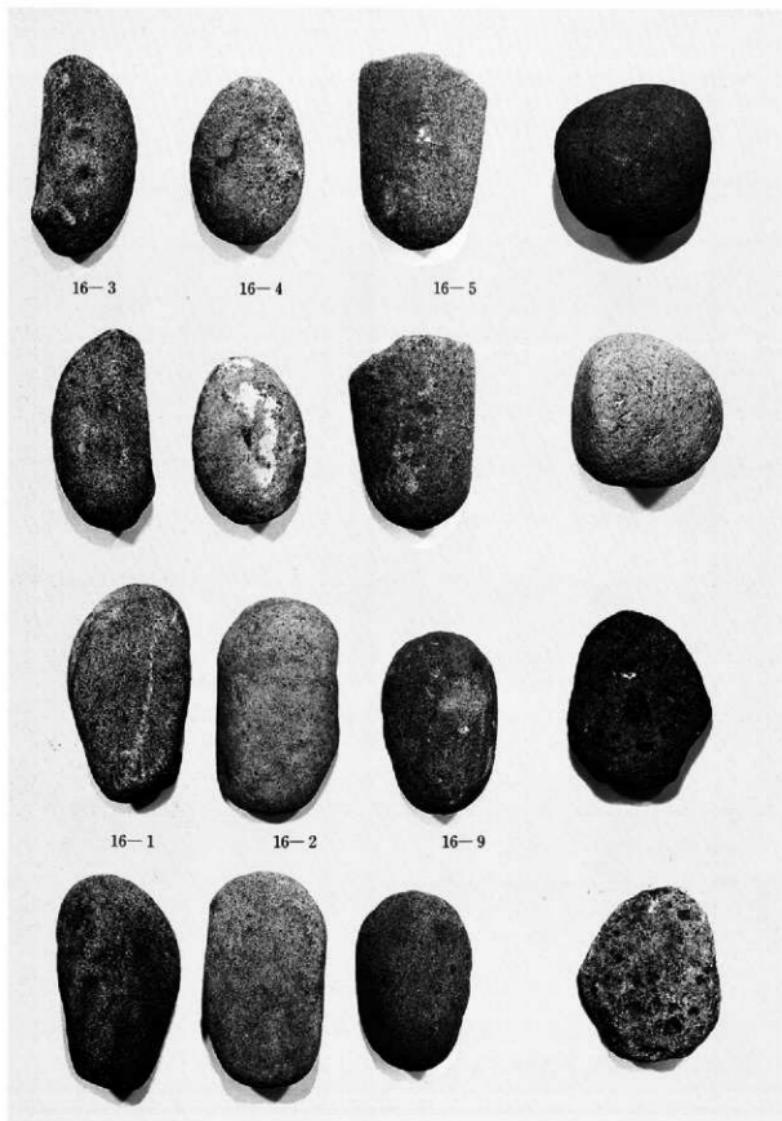
純文土器 (1)

図版12

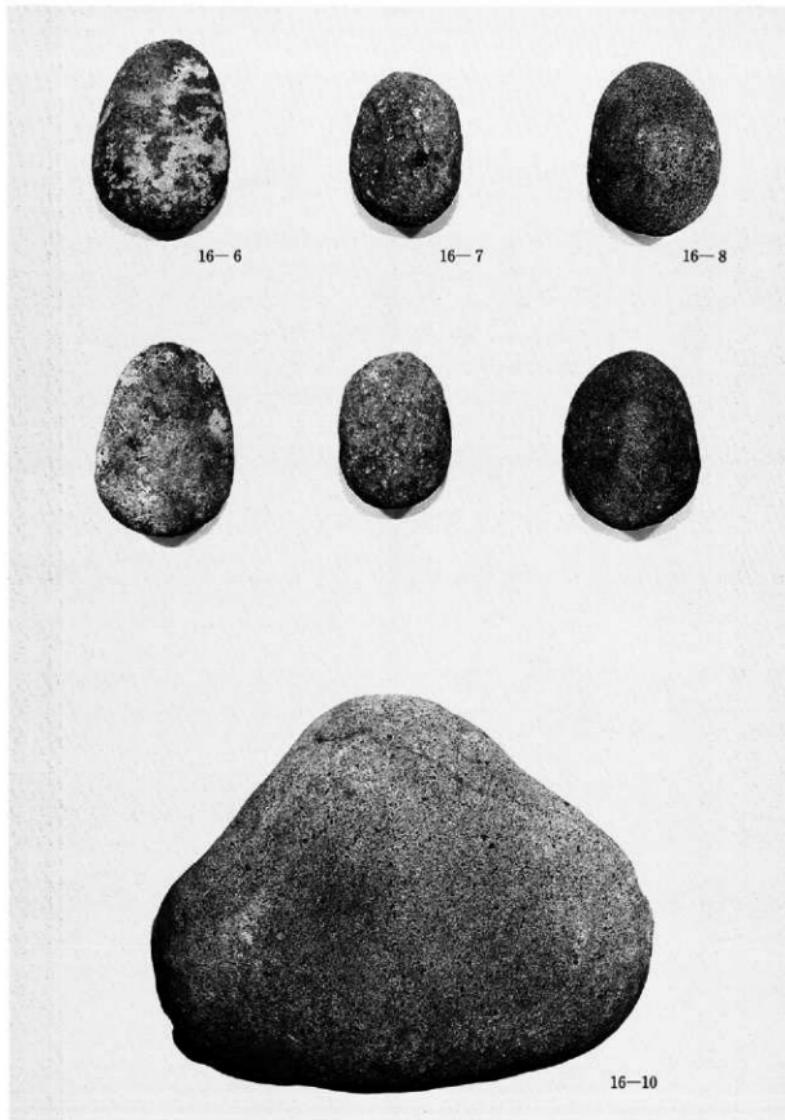




図版14



石器(2)



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第8集

松原遺跡発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 0236-72-5301

印刷 藤庄印刷株式会社
